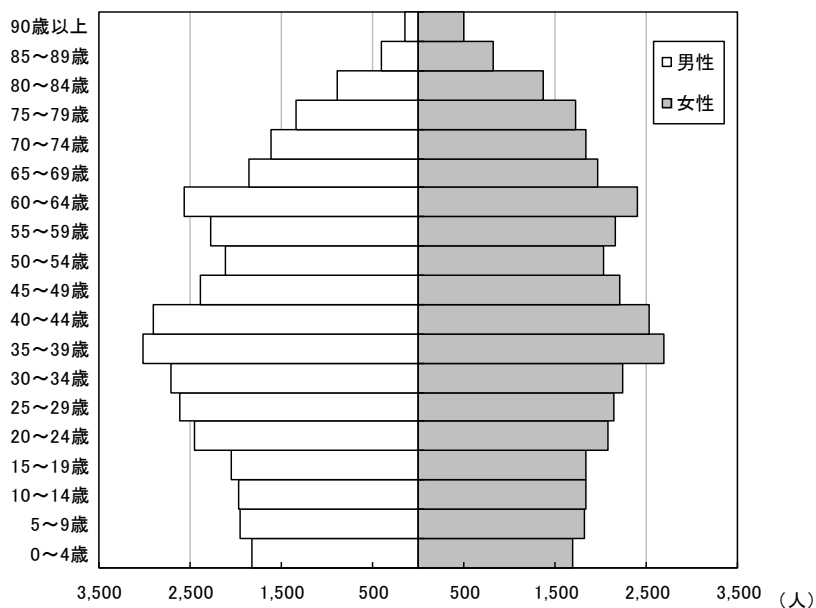


II 食を取り巻く現状

1 人口及び世帯数

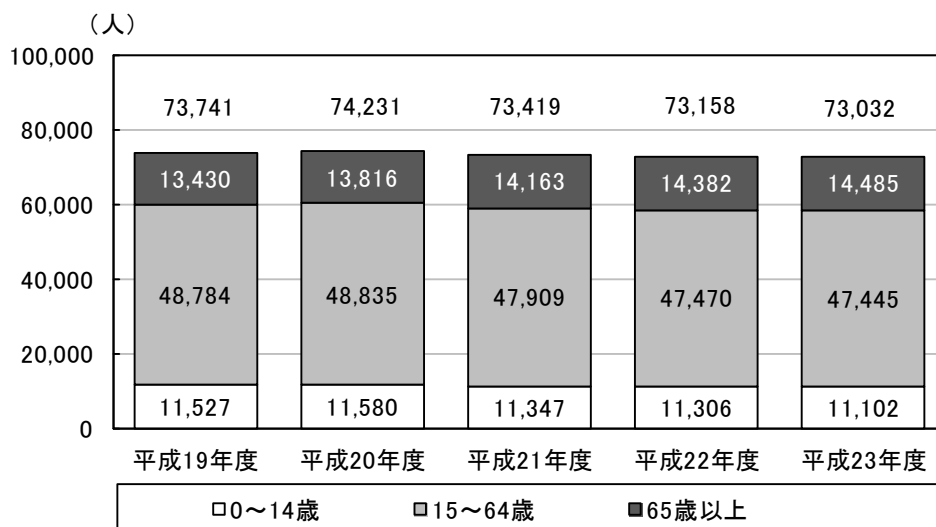
本市の5歳階級別男女別人口をみると、20代後半～40代前半の子育て世代の人口が多くなっています。また、年齢3区分別人口の推移をみると、0～14歳の年少人口と、15～64歳の生産年齢人口が減少し、65歳以上の高齢者人口が増加しており、少子高齢化が進行しています。

◆5歳階級別男女別人口



資料：住民基本台帳・外国人登録人口（平成23年9月30日）

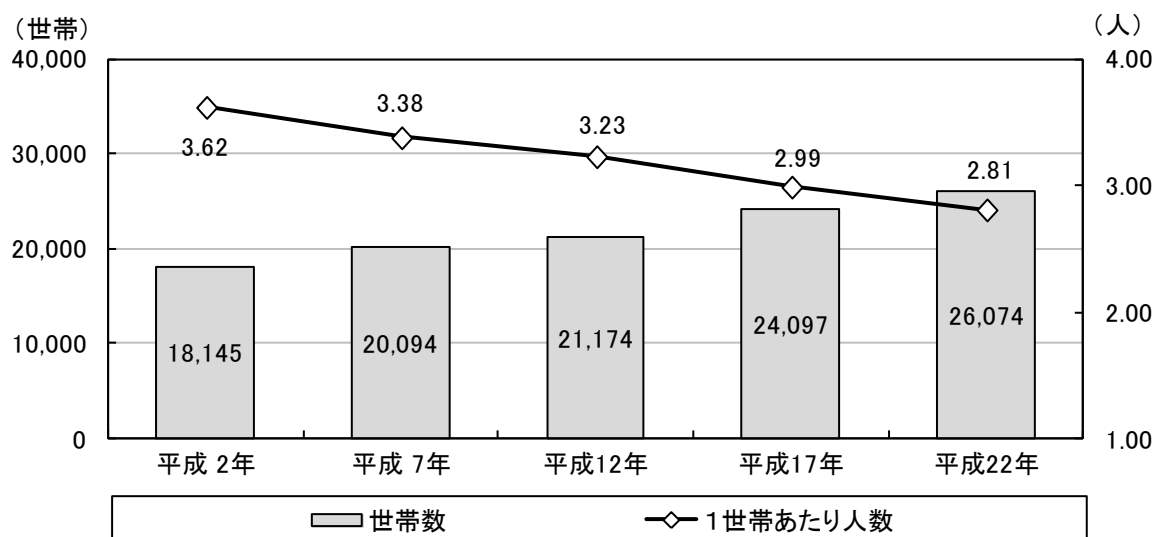
◆年齢3区分別人口の推移



資料：住民基本台帳・外国人登録人口（各年9月30日）

本市の世帯数の推移をみると、平成 2 年には 18,145 世帯でしたが、平成 22 年には 26,074 世帯に増加しています。1 世帯あたり人数は、平成 22 年には 2.81 人まで減少しています。

◆世帯数の推移



資料：住民基本台帳・外国人登録人口（各年 3 月 31 日）

2 健康の状況

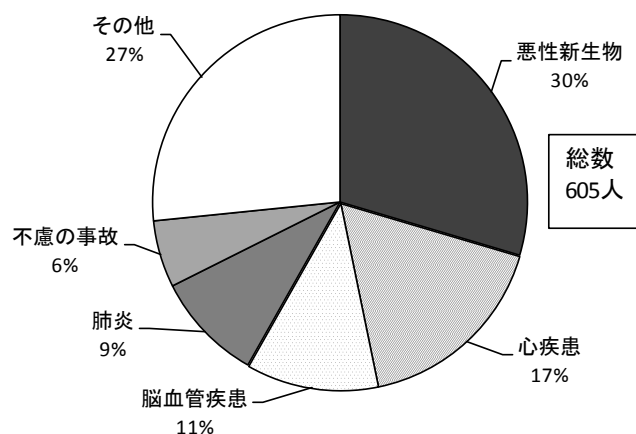
本市の死因別死亡割合をみると、「悪性新生物」「心疾患」「脳血管疾患」が上位を占めています。これらのいわゆる 3 大疾病を死因とする死亡者数は、全体の約 6 割となっています。

それぞれの年次推移をみると、悪性新生物は、国・県を下回って推移していましたが、平成 22 年には県を上回っています。

心疾患は、平成 20 年まで増加傾向にありましたが、平成 21 年には減少に転じ、平成 22 年に再び増加しています。

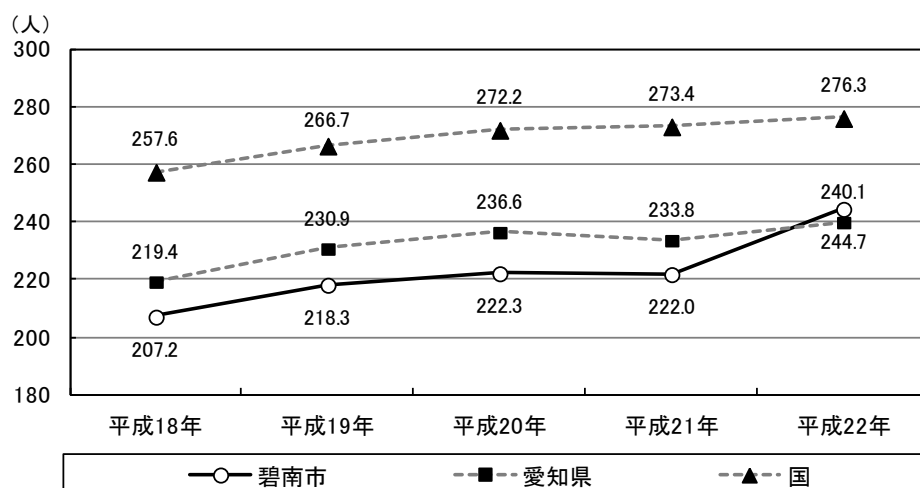
脳血管疾患は、平成 19 年以降増加し、平成 21 年には国を上回りましたが、平成 22 年は、国と同程度に下がっています。

◆碧南市の死因別死亡割合（平成 22 年）



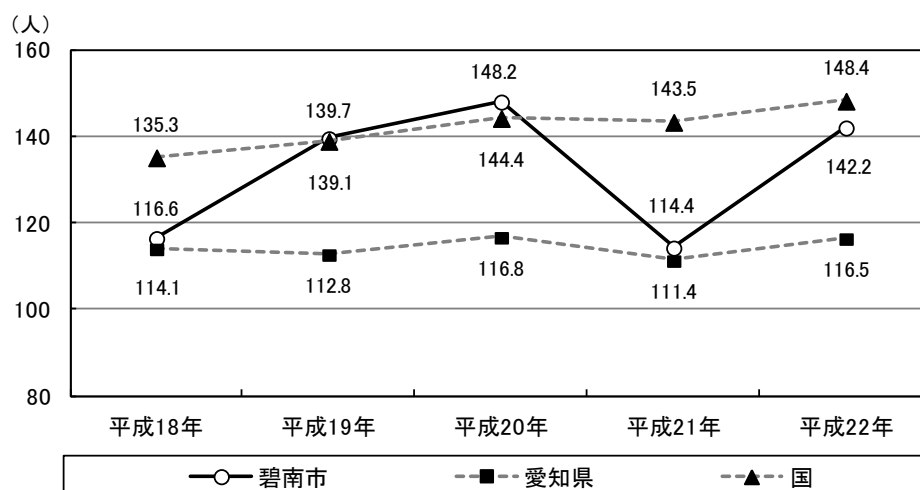
資料：健康課

◆悪性新生物死亡率(人口 10 万対比)



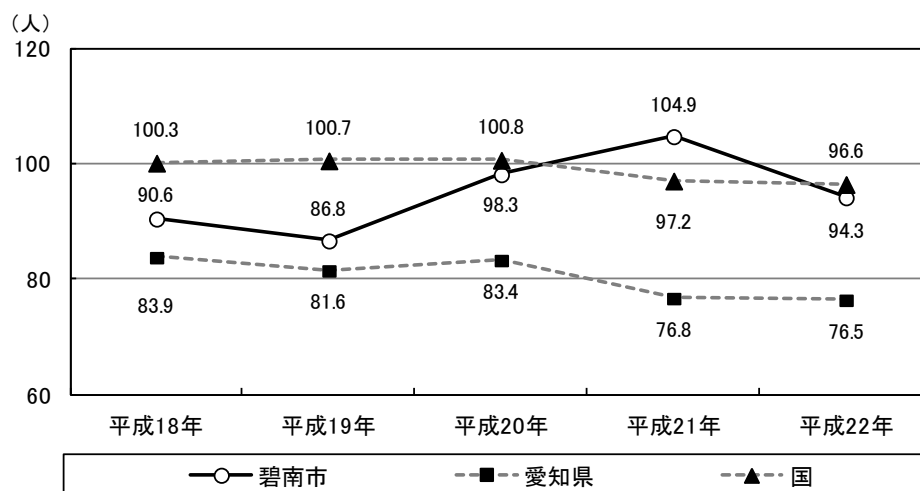
資料：碧南市保健センター年報

◆心疾患死亡率(人口 10 万対比)



資料：碧南市保健センター年報

◆脳血管疾患死亡率(人口 10 万対比)



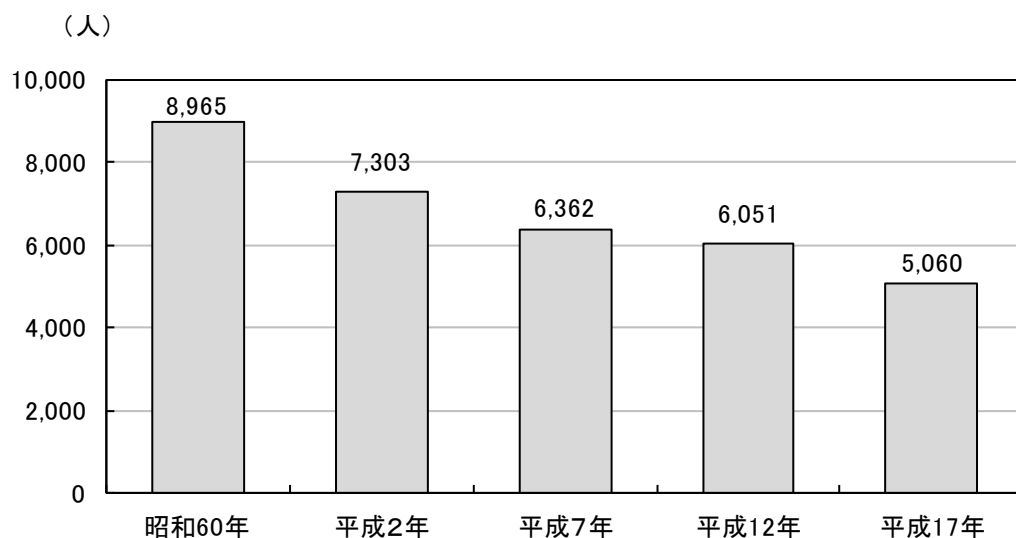
資料：碧南市保健センター年報

3 農業・漁業の状況

本市の農家人口の推移をみると、昭和 60 年の 8,965 人から、平成 17 年には 5,060 人と、約 3,900 人減少しています。

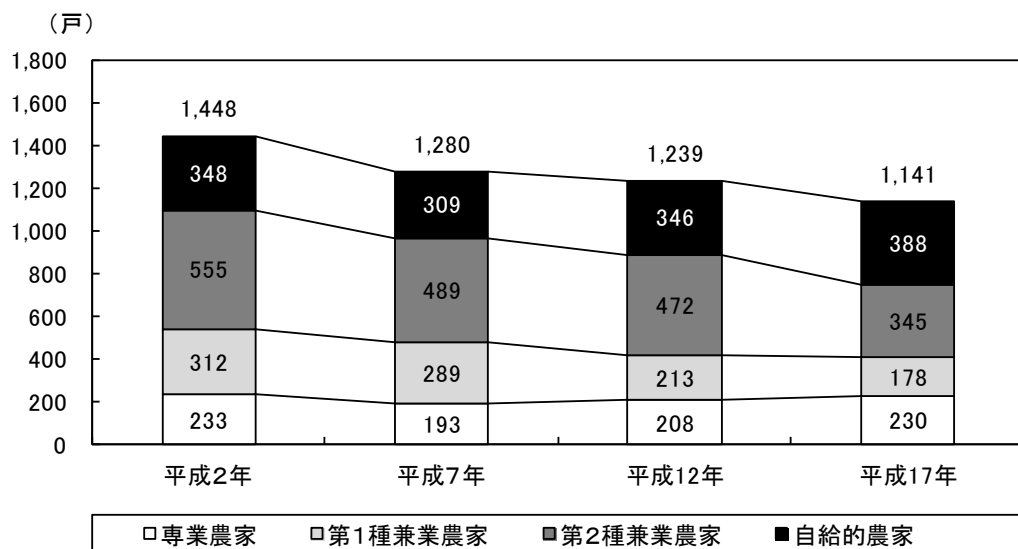
専業・兼業別農家数は、兼業農家（第 1 種兼業農家・第 2 種兼業農家）の数は減少しているものの、専業農家は平成 7 年以降、増加傾向にあります。

◆農家人口の推移



資料：農林業センサス 第 1 巻 愛知県統計書

◆専業・兼業別農家数の推移



資料：農林業センサス 第 1 巻 愛知県統計書

本市の主要農作物は、にんじん、たまねぎが年間 10,000 t 以上の収穫量となっています。本市では、下記表以外でもトマト、だいこん、かんしょ、いちじくなど多種の農作物の栽培が盛んです。

水稻、麦、大豆は、減少傾向となっています。

◆主要農作物収穫量

単位：t

区 分	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
水稻	1,510	1,510	1,470	1,300	1,390
麦	361	290	351	331	241
大豆	50	84	111	89	51
にんじん	13,400	14,578	13,500	12,900	13,200
たまねぎ	12,500	11,200	13,300	12,900	11,600
きゅうり	993	936	960	1,040	1,010
なす	544	331	333	275	292

資料：東海農林水産統計年報 ※平成 20 年までは愛知農林水産統計年報

本市の魚種別漁獲量をみると、年によってばらつきはあるものの、いわし類、しらす、あじ類、いかなごなどの漁獲量が多くなっています。

◆魚種別漁獲量の推移

単位：t

区 分	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
このしろ	1,479	824	482	450	107
いわし類	1,456	282	1,433	5,704	3,021
しらす	1,053	520	740	1,368	543
あじ類	516	393	877	274	343
さば類	283	560	88	9	66
いかなご	563	1,926	741	621	218
あなご類	65	52	68	69	56
あさり類	34	82	157	129	47

資料：東海農林水産統計年報 ※平成 20 年までは愛知農林水産統計年報

4 アンケート結果

(1) 調査概要

- ・調査地域：碧南市全域
- ・調査対象者：【市民】20歳以上の市民
 ：【保護者】3歳児（年少児）、5歳児（年長児）、小学2年生の保護者
 ：【小・中・高校生】小学5年生、中学2年生、高校1～3年生
- ・調査期間：平成23年9月1日～9月20日
- ・調査方法：【市民】郵送による配布・回収
 ：【保護者】保育園・幼稚園・学校を通じた配布・回収
 ：【小・中・高校生】学校を通じた配布・回収

		配布数	回収数	回収率
市民		1,400人	685人	48.9%
保護者	3歳児（年少児）	163人	154人	94.5%
	5歳児（年長児）	201人	174人	86.6%
	小学2年生	213人	202人	94.8%
	不明	—	2人	—
小・中・高校生	小学5年生	240人	237人	98.8%
	中学2年生	170人	170人	100.0%
	高校1～3年生	235人	232人	98.7%
	不明	—	3人	—

(2) グラフの見方

- 回答結果の割合「％」は有効サンプル数に対して、それぞれの回答数の割合を小数点以下第2位で四捨五入したものです。そのため、単数回答（複数の選択肢から1つの選択肢を選ぶ方式）であっても合計値が100.0%にならない場合があります。
- 複数回答（複数の選択肢から2つ以上の選択肢を選ぶ方式）の設問の場合、回答は選択肢ごとの有効回答数に対して、それぞれの割合を示しています。そのため、合計が100.0%を超える場合があります。
- 図表中において「不明・無回答」とあるものは、回答が示されていない、または回答の判別が困難なものです。
- 図表中の「N（number of case）」は、集計対象者総数（あるいは回答者限定設問の限定条件に該当する人）を表しています。「不明・無回答」がある場合、クロス集計（性別、年齢別）の合計のN数と全体のN数が一致しない場合があります。

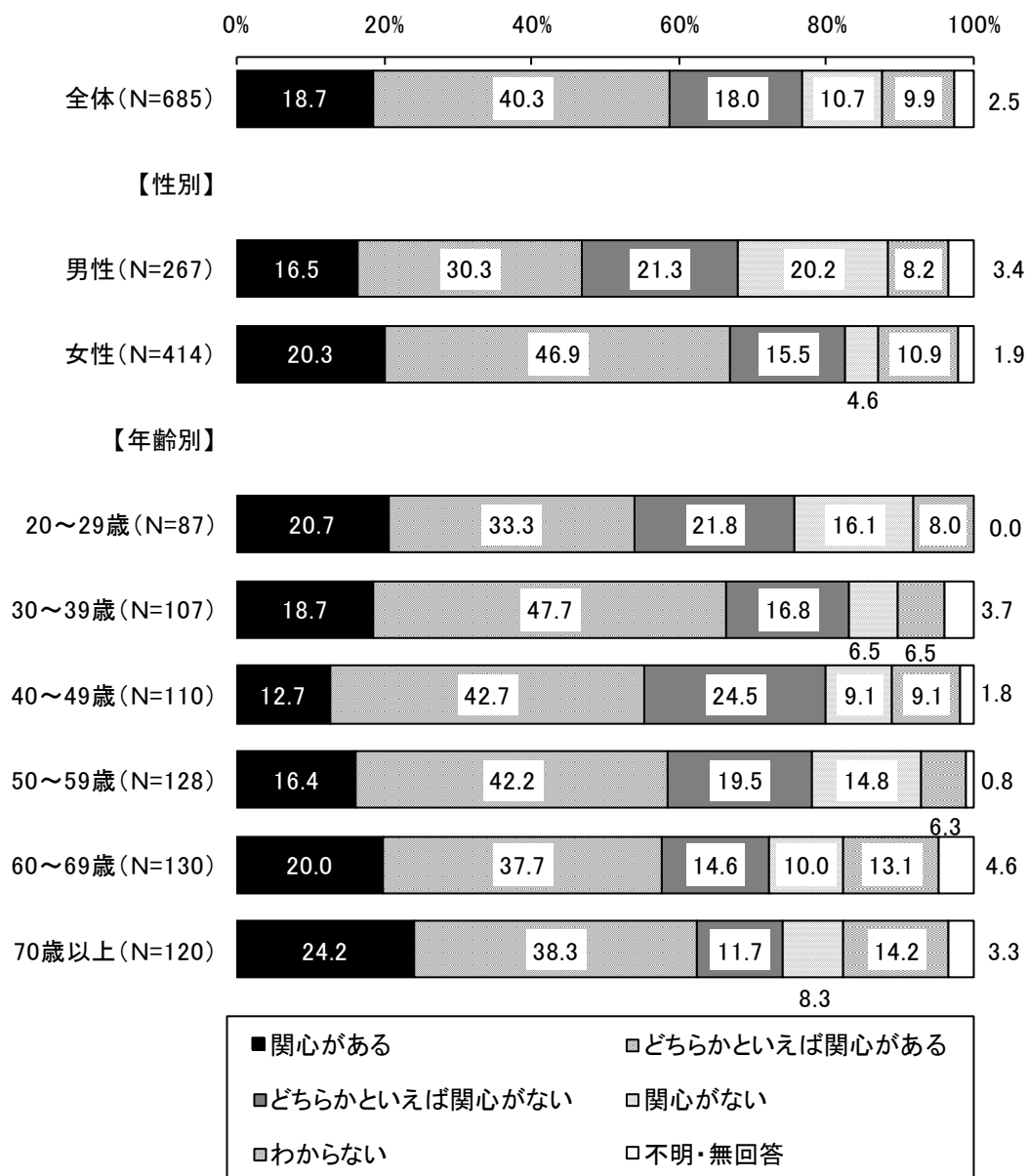
(3)「食育」への関心度について

「食育」に関心があるかでは、「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を合わせた『関心がある』の割合が59.0%となっています。

性別でみると、女性で『関心がある』が67.2%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、30～39歳で『関心がある』が66.4%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民 (単数回答)

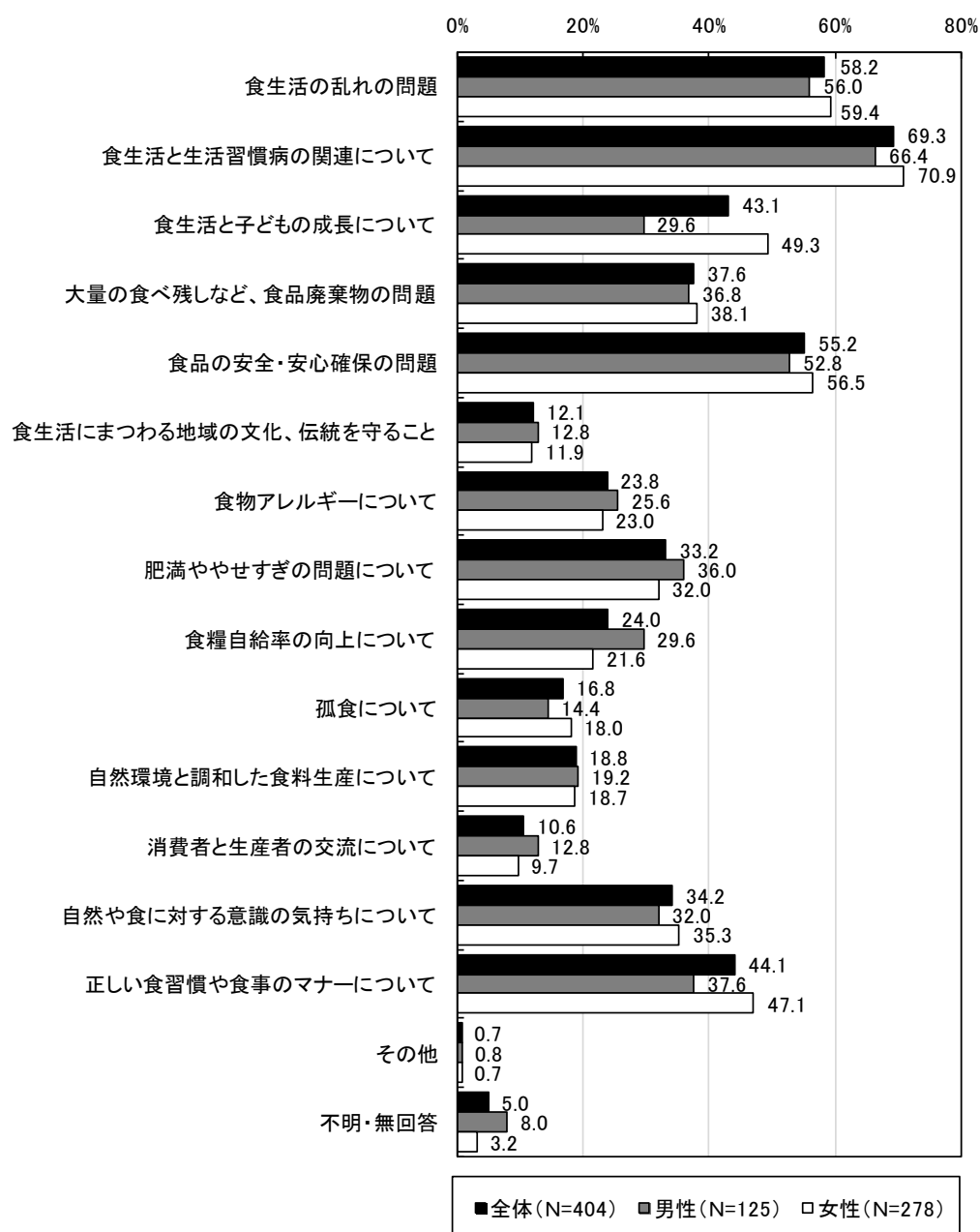


(4)「食育」で関心のあることについて

市民が、「食育」で関心のあることは、「食生活と生活習慣病の関連について」が 69.3%と最も高く、次いで「食生活の乱れの問題」が 58.2%と高くなっています。

性別でみると、男性は「肥満ややせすぎの問題について」「食糧自給率の向上について」などが女性よりも高く、女性は「食生活と子どもの成長について」「正しい食習慣や食事のマナーについて」などが男性よりも高くなっています。

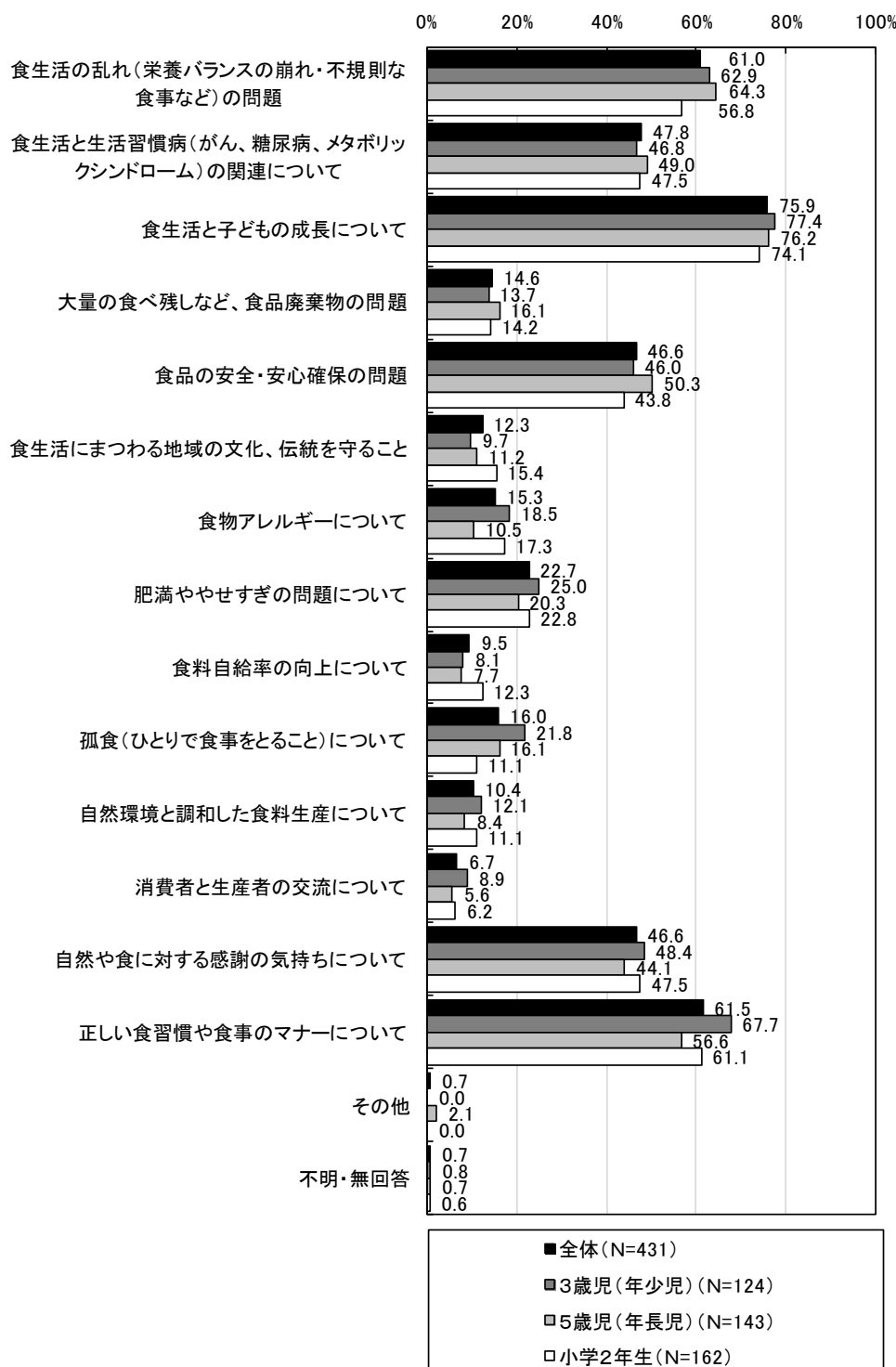
市民 [関心がある、どちらかといえば関心があると答えた人への設問] (複数回答)



保護者が、「食育」に関心のあることは、「食生活と子どもの成長について」が75.9%と最も高く、次いで「正しい食習慣や食事のマナーについて」が61.5%と高くなっています。

年齢・学年別でみると、3歳児（年少児）では「孤食について」「正しい食習慣や食事のマナーについて」などが、5歳児（年長児）では「食生活の乱れの問題」「食品の安全・安心確保の問題」など、小学2年生では「食生活にまつわる地域の文化、伝統を守ること」「食料自給率の向上について」などが他の年齢・学年に比べて高くなっています。

保護者 [関心がある、どちらかといえば関心があると答えた人への設問]（複数回答）



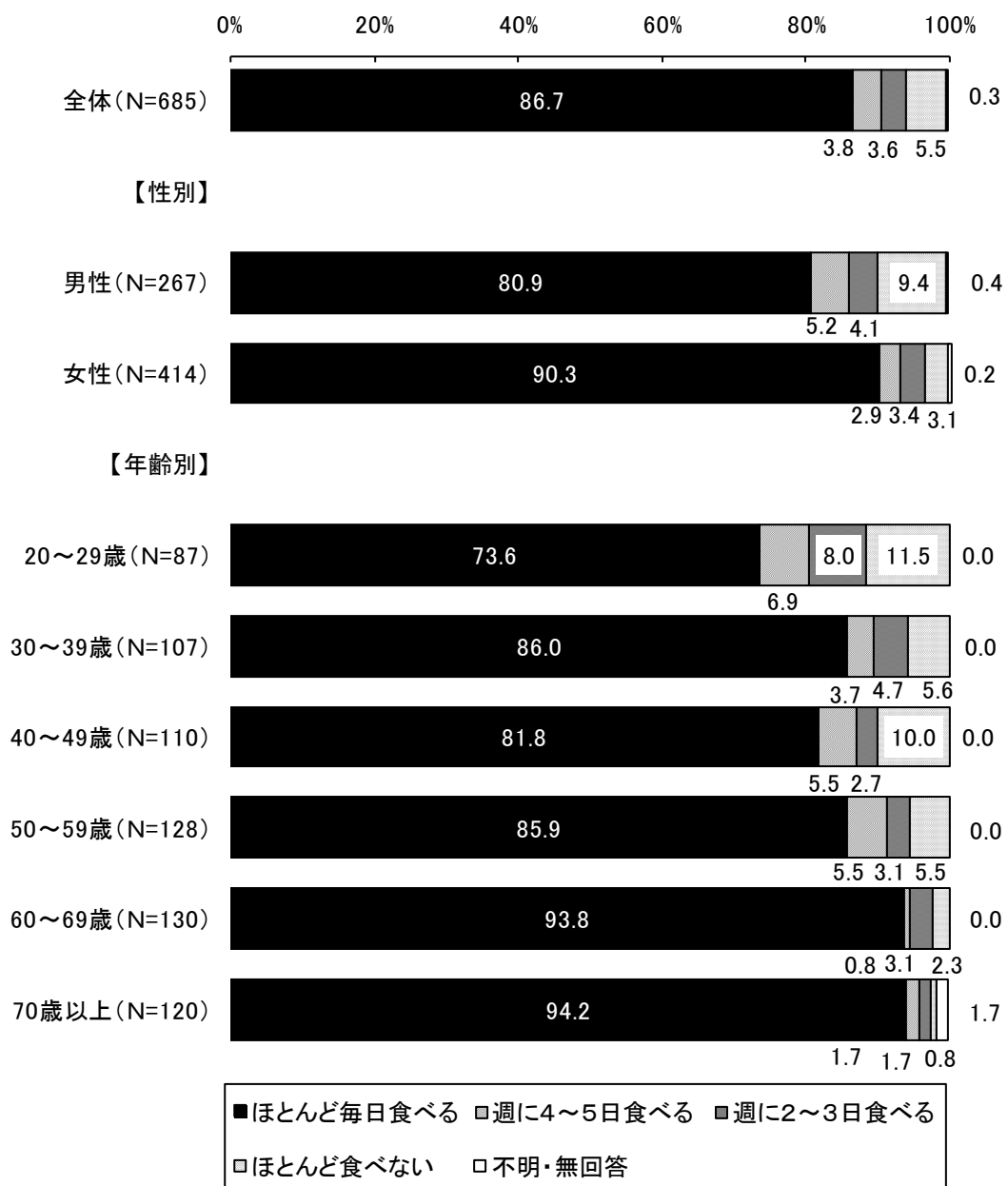
（５）朝食の摂取状況について

市民の朝食の摂取状況をみると、「ほとんど毎日食べる」が86.7%と最も高く、次いで「ほとんど食べない」が5.5%と高くなっています。

性別でみると、女性で「ほとんど毎日食べる」が90.3%と、男性に比べて高くなっています。年齢別でみると、20～29歳で、「ほとんど毎日食べる」が73.6%と他の年齢と比べて低くなっています。なお、性別・年齢別でみると、「ほとんど食べない」が男性の20～29歳で18.9%と最も高くなっています。

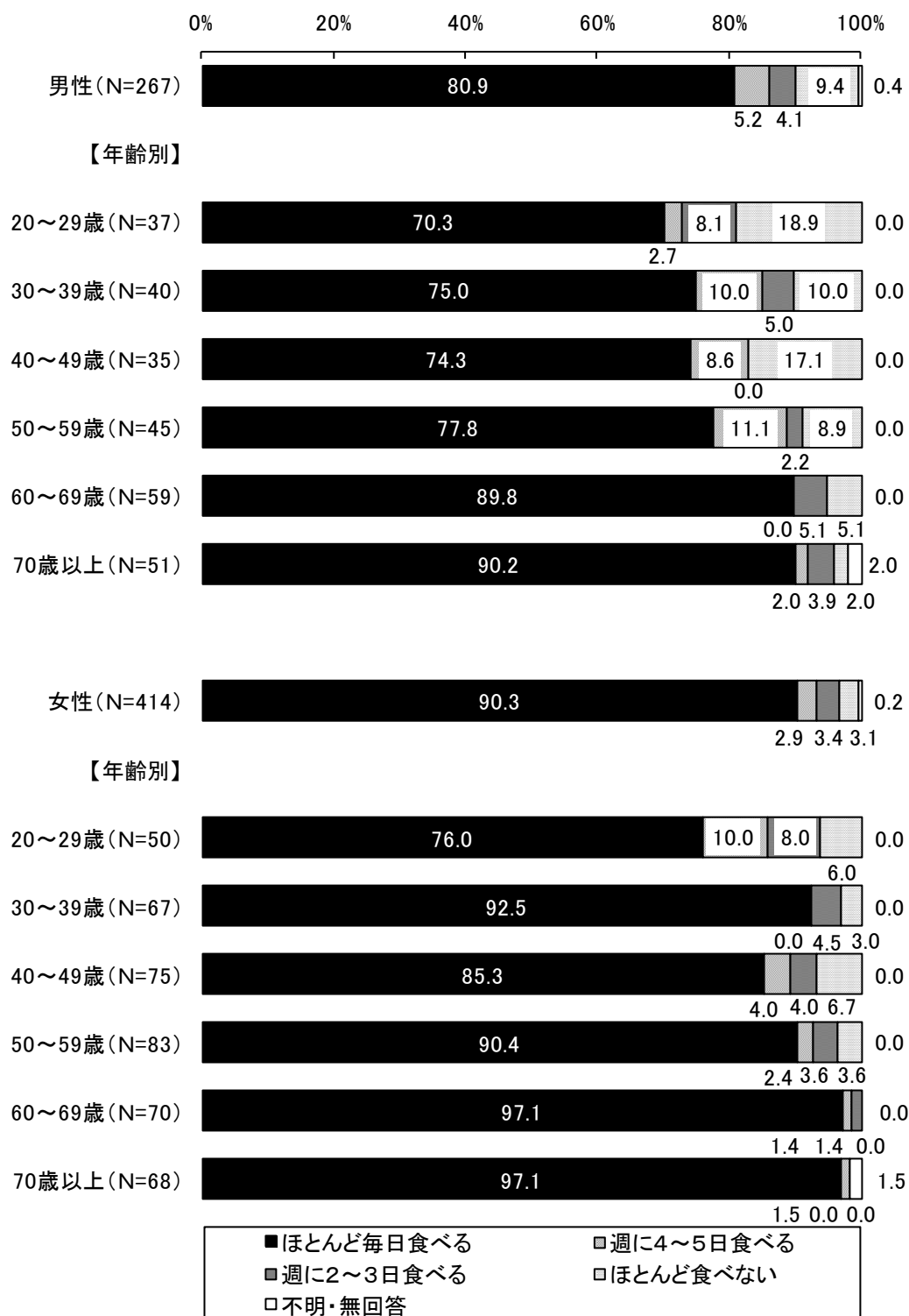
また、起床時間、就寝時間の遅い人は、朝食の摂取機会が少ない傾向にあります。

市民（単数回答）

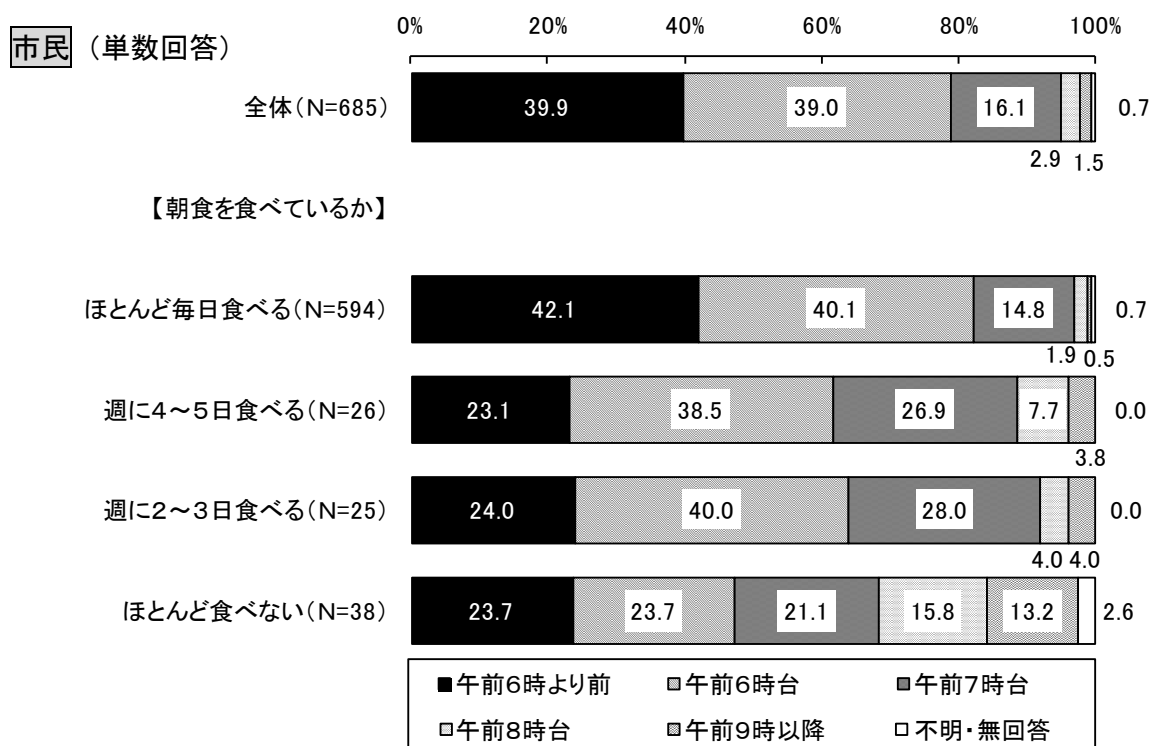


■朝食の摂取状況×性別×年齢

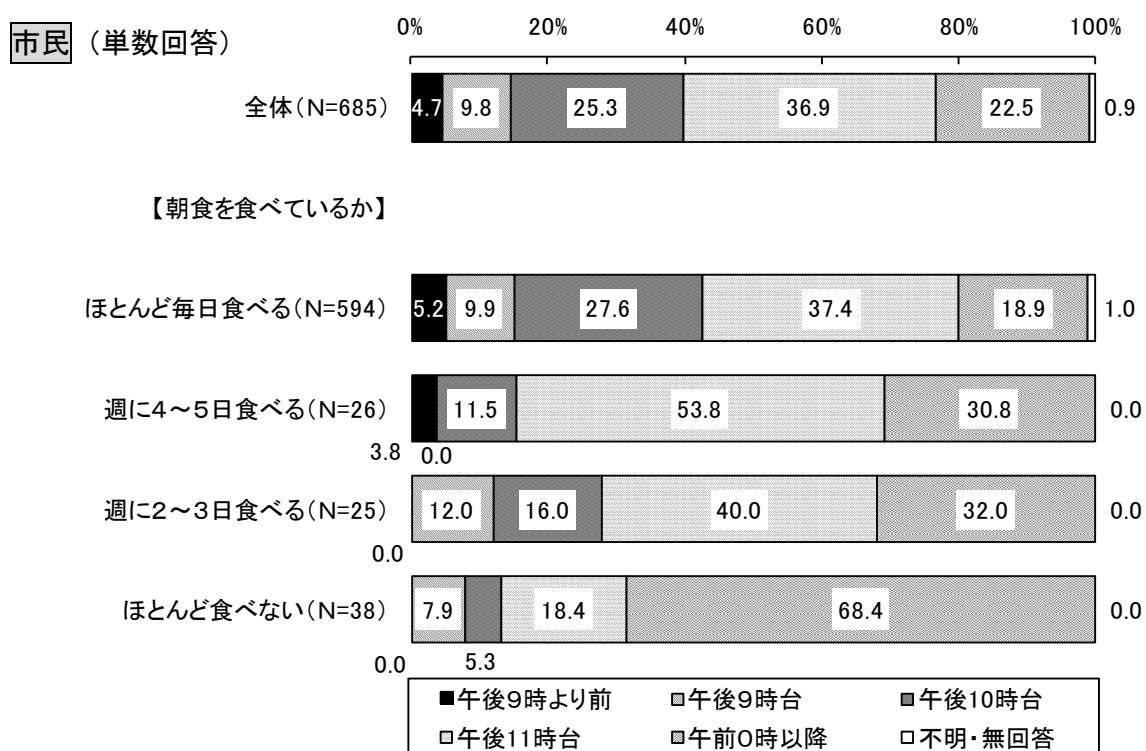
市民（単数回答）



■朝食の摂取状況×起床時間



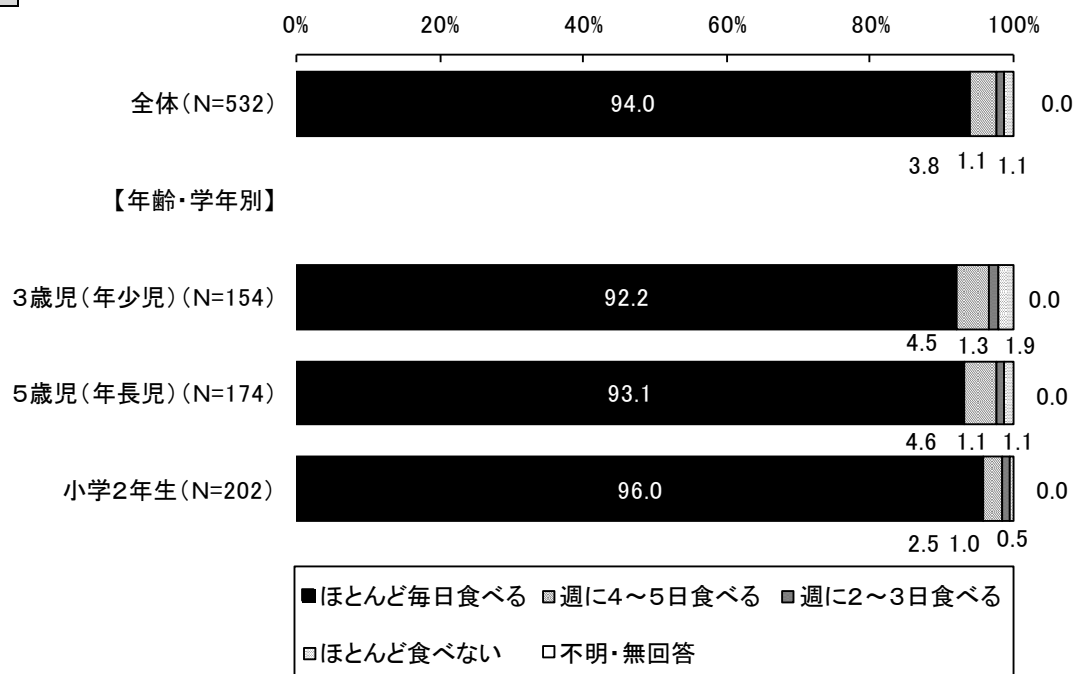
■朝食の摂取状況×就寝時間



朝食を食べているかは、「ほとんど毎日食べる」が94.0%と最も高く、次いで「週に4～5日食べる」が3.8%と高くなっています。

年齢・学年別では大きな差はみられません。

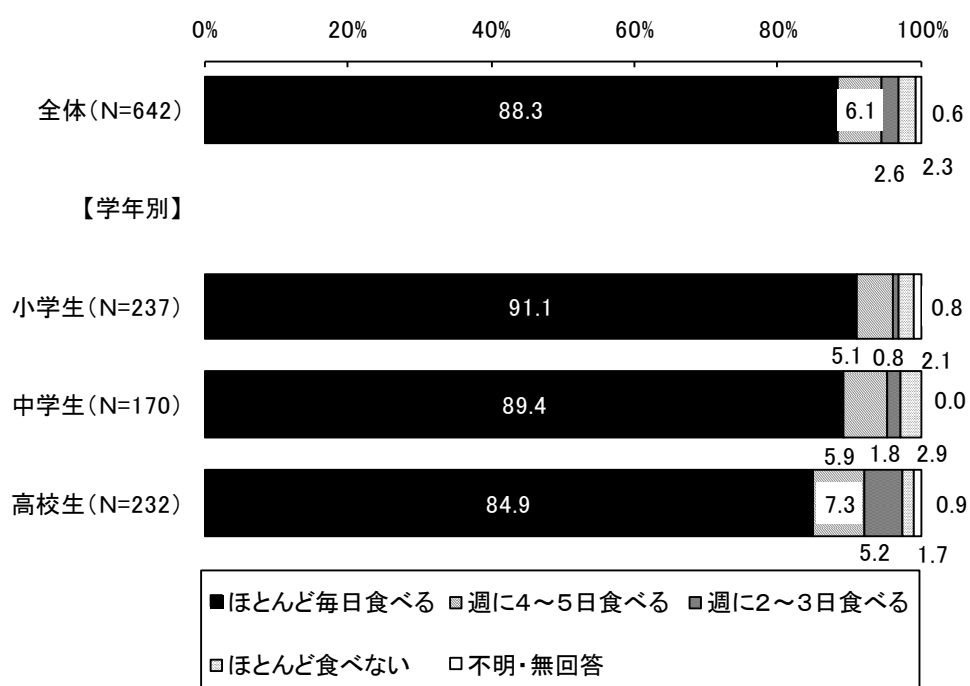
保護者 (単数回答)



小・中・高校生では、「ほとんど毎日食べる」が88.3%と最も高く、次いで「週に4～5日食べる」が6.1%と高くなっています。

学年別でみると、学年が上がるにつれ「ほとんど毎日食べる」が低くなっています。

小・中・高校生 (単数回答)



（６）共食の状況

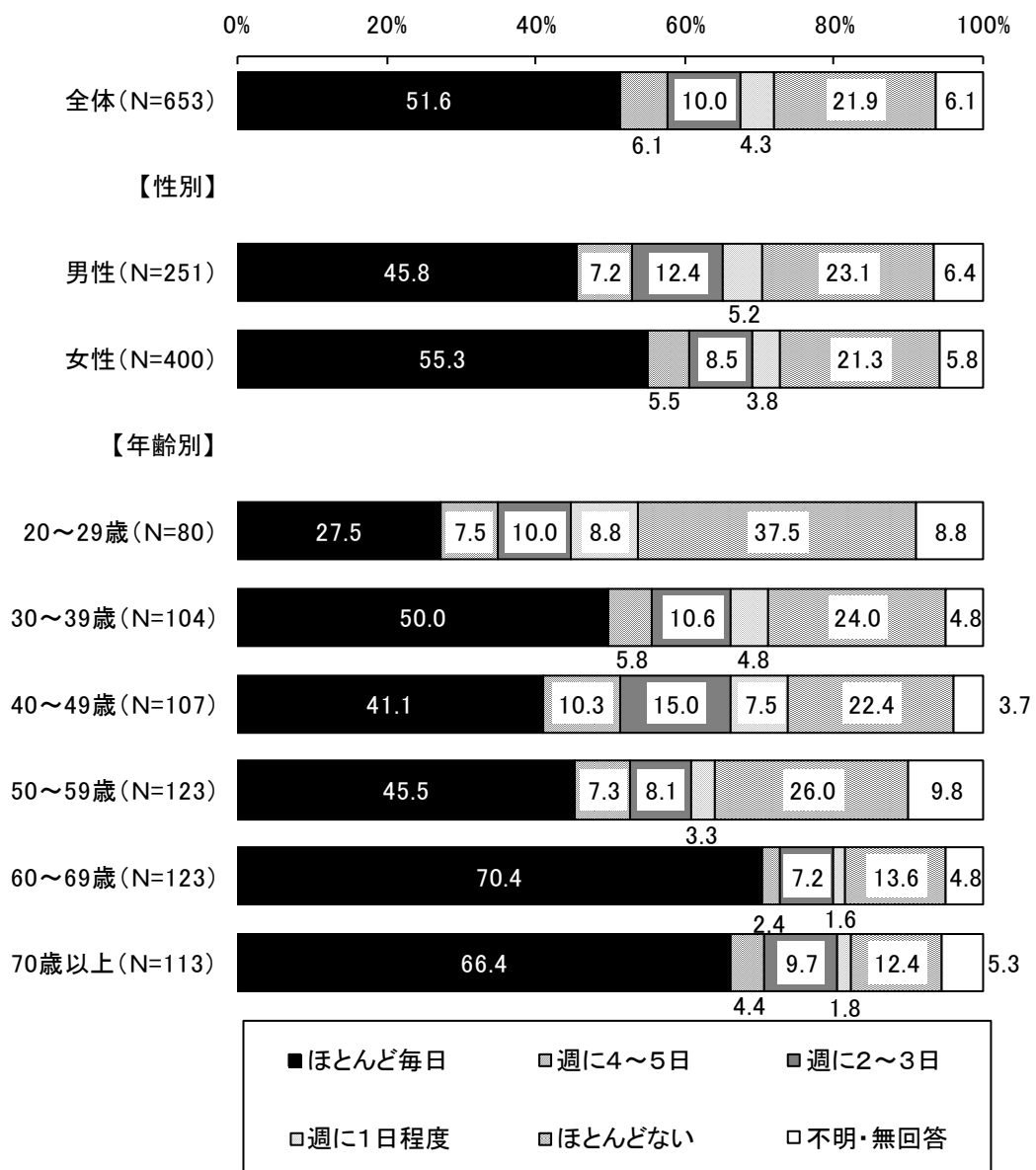
①朝食

朝食を家族の誰かと一緒に食べる頻度は、「ほとんど毎日」が51.6%と最も高く、次いで「ほとんどない」が21.9%と高くなっています。

性別でみると、女性で「ほとんど毎日」が55.3%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、60～69歳で「ほとんど毎日」が70.4%と、他の年代に比べて高くなっています。また、20～29歳で「ほとんどない」が37.5%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民〔ひとり暮らしを除く〕（単数回答）

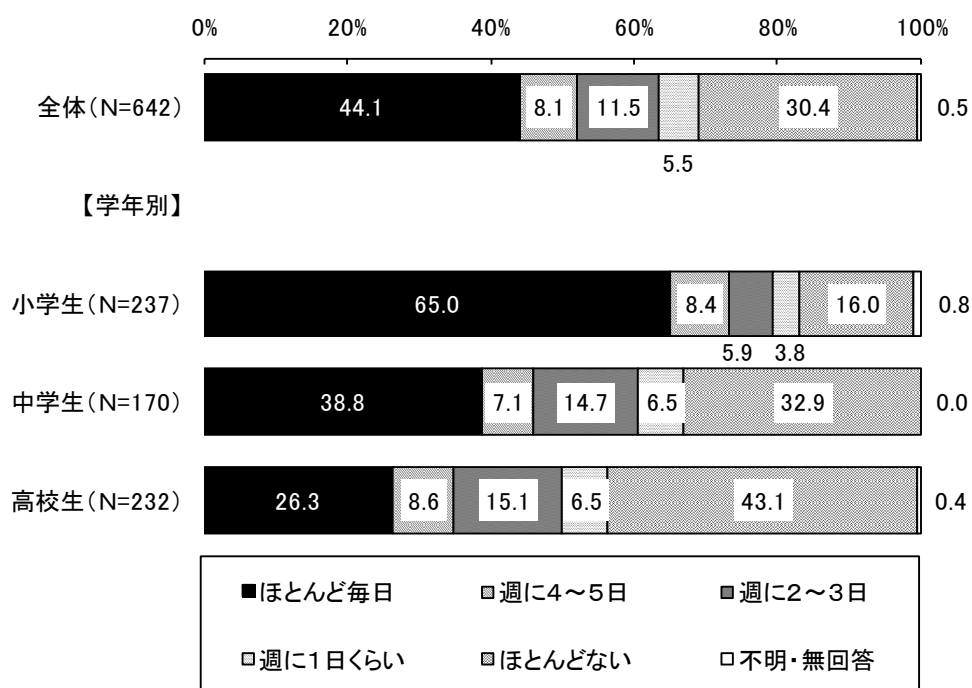


②朝食（小・中・高校生）

朝食を家族の誰かと一緒に食べる頻度は、「ほとんど毎日」が44.1%と最も高く、次いで「ほとんどない」が30.4%と高くなっています。

学年別でみると、学年が上がるにつれ「ほとんど毎日」が低くなり、「ほとんどない」が高くなっています。

小・中・高校生（単数回答）



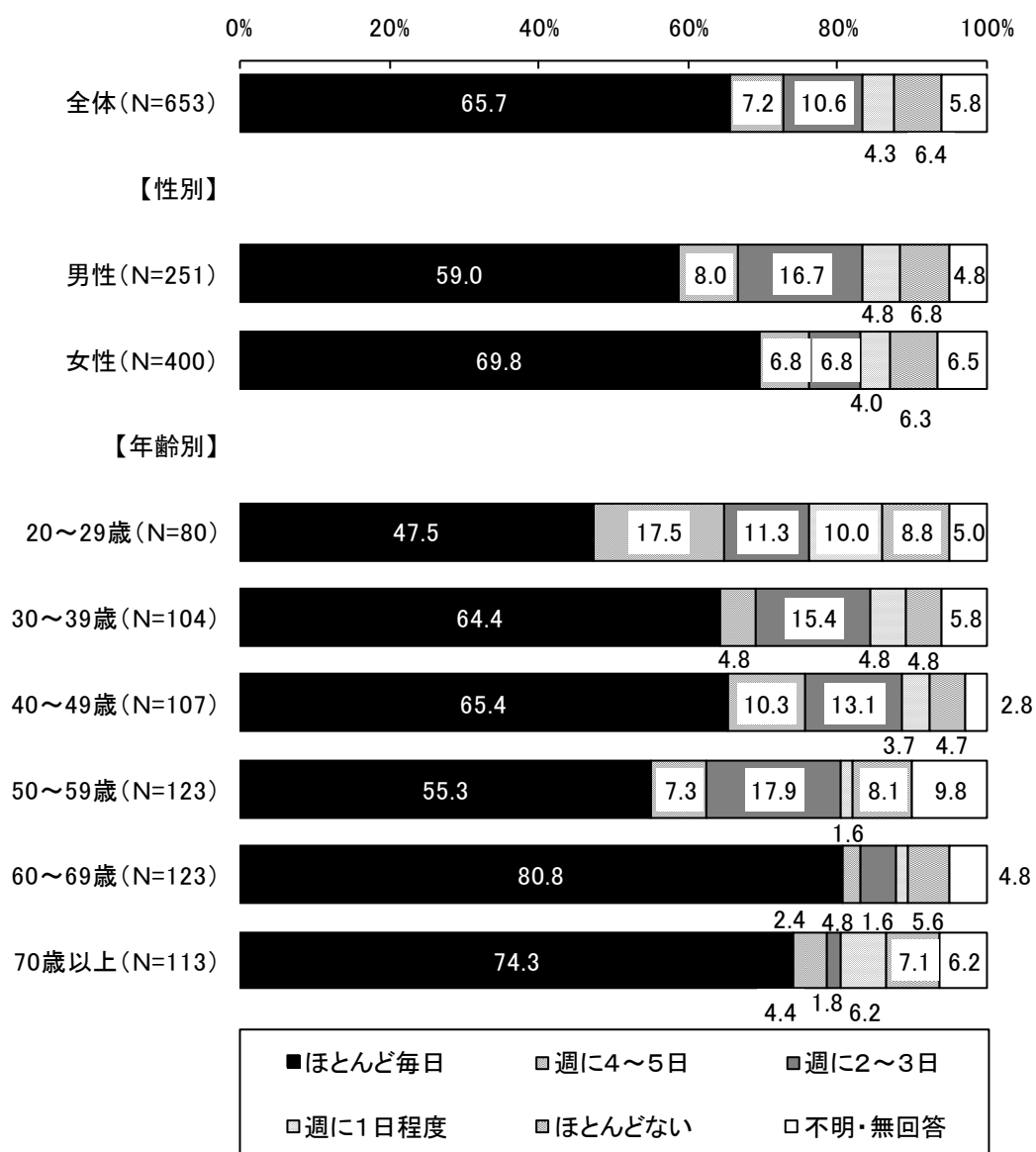
③夕食

夕食を家族の誰かと一緒に食べる頻度は、「ほとんど毎日」が65.7%と最も高く、次いで「週に2～3日」が10.6%と高くなっています。

性別でみると、女性で「ほとんど毎日」が69.8%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、60～69歳で「ほとんど毎日」が80.8%と、他の年代に比べて高くなっている一方、20～29歳では47.5%と、他の年代に比べて低くなっています。

市民[ひとり暮らしを除く]（単数回答）

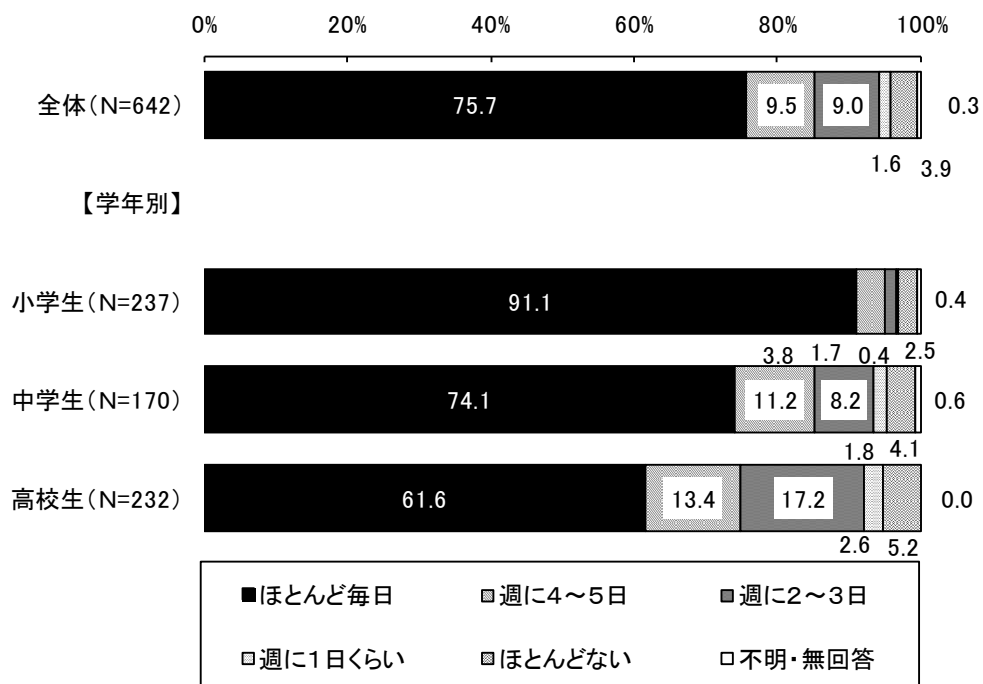


④夕食（小・中・高校生）

夕食を家族の誰かと一緒に食べる頻度は、「ほとんど毎日」が75.7%と最も高く、次いで「週に4～5日」が9.5%となっています。

学年別でみると、学年が上がるにつれ「ほとんど毎日」が低くなっています。

小・中・高校生（単数回答）

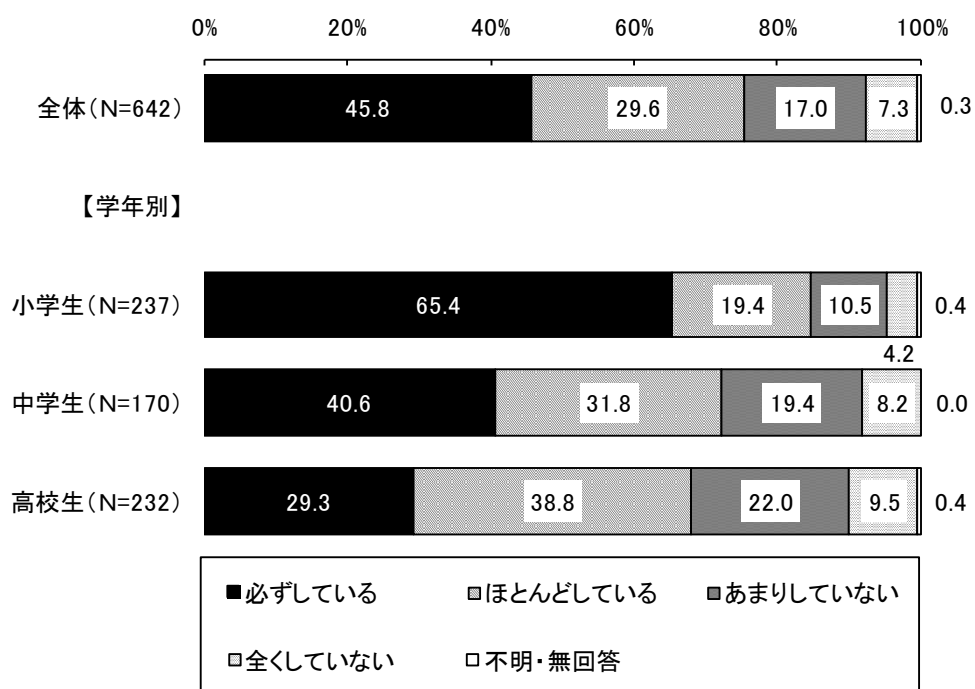


(7) 「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつについて

食事のとき、あいさつをしているかは、「必ずしている」が45.8%と最も高く、次いで「ほとんどしている」が29.6%となっています。

学年別でみると、学年が上がるにつれ「必ずしている」が低くなっています。

小・中・高校生（単数回答）



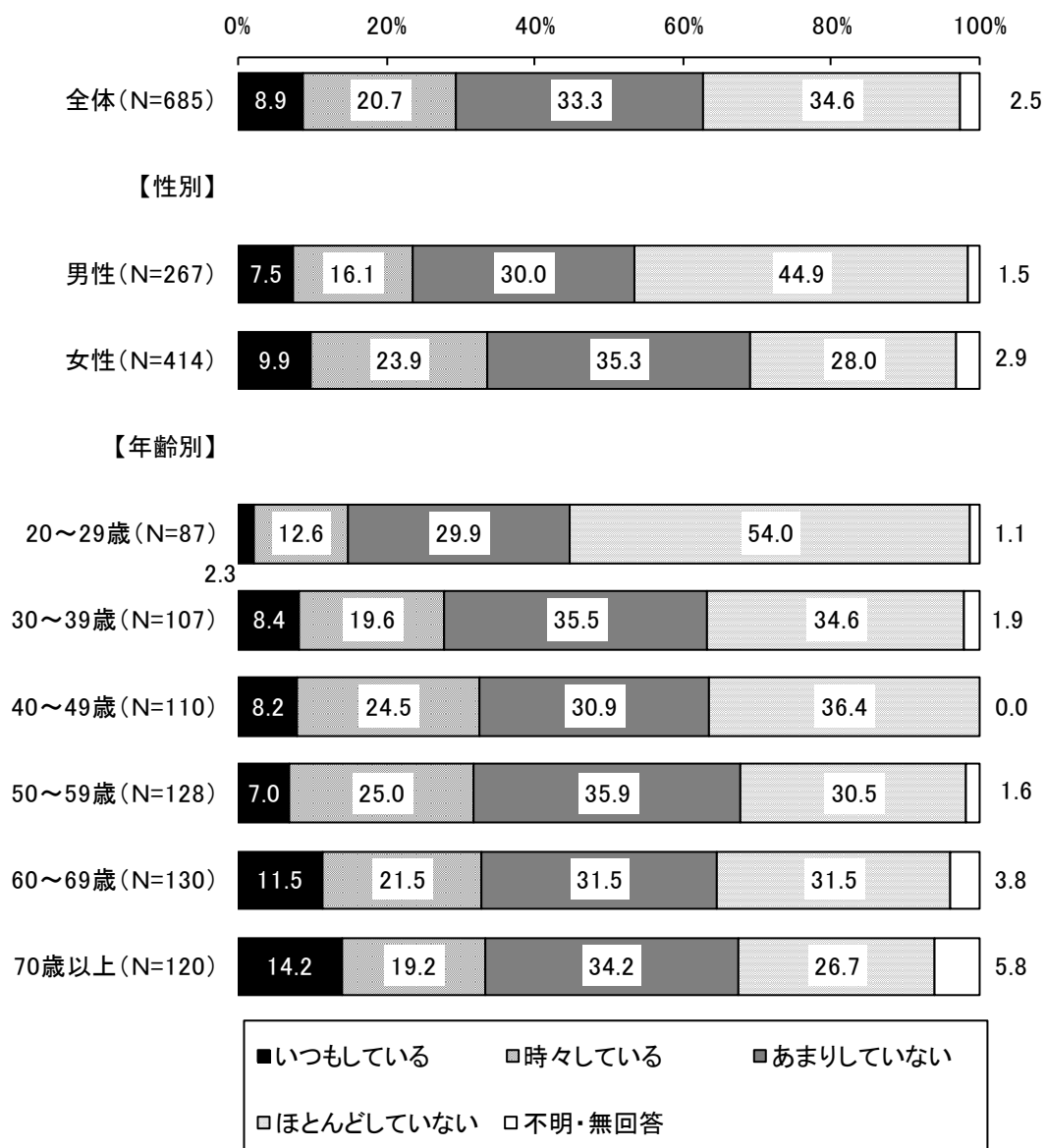
（８）「食事バランスガイド」などの科学的根拠に基づいた指針を活用し、栄養バランスに配慮した食事をしているかについて

「食事バランスガイド」などを活用し、栄養バランスに配慮した食事をしているかは、「いつもしている」と「時々している」を合わせた『している』の割合が29.6%、「あまりしていない」と「ほとんどしていない」を合わせた『していない』の割合が67.9%となっています。

性別でみると、女性で『している』が33.8%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、20～29歳で『していない』が83.9%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民（単数回答）



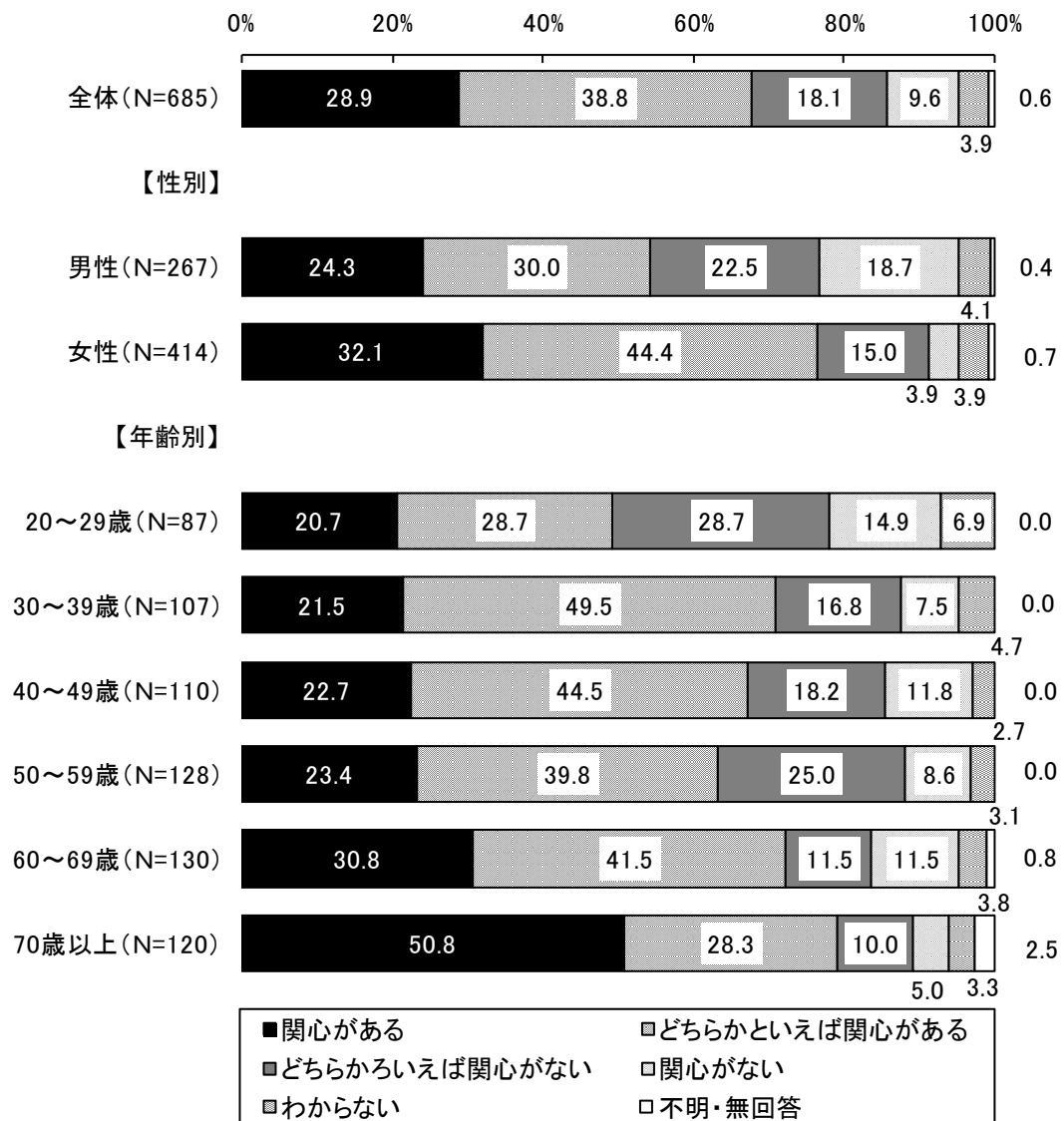
（９）よく噛んで味わって食べるなどの食べ方に関心があるかについて

よく噛んで味わって食べるなどの食べ方に関心があるかは、「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を合わせた『関心がある』の割合が67.7%となっています。

性別でみると、女性で『関心がある』が76.5%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、70歳以上で『関心がある』が79.1%と、他の年代に比べて高くなっている一方、20～29歳では49.4%と、他の年代に比べて低くなっています。

市民（単数回答）



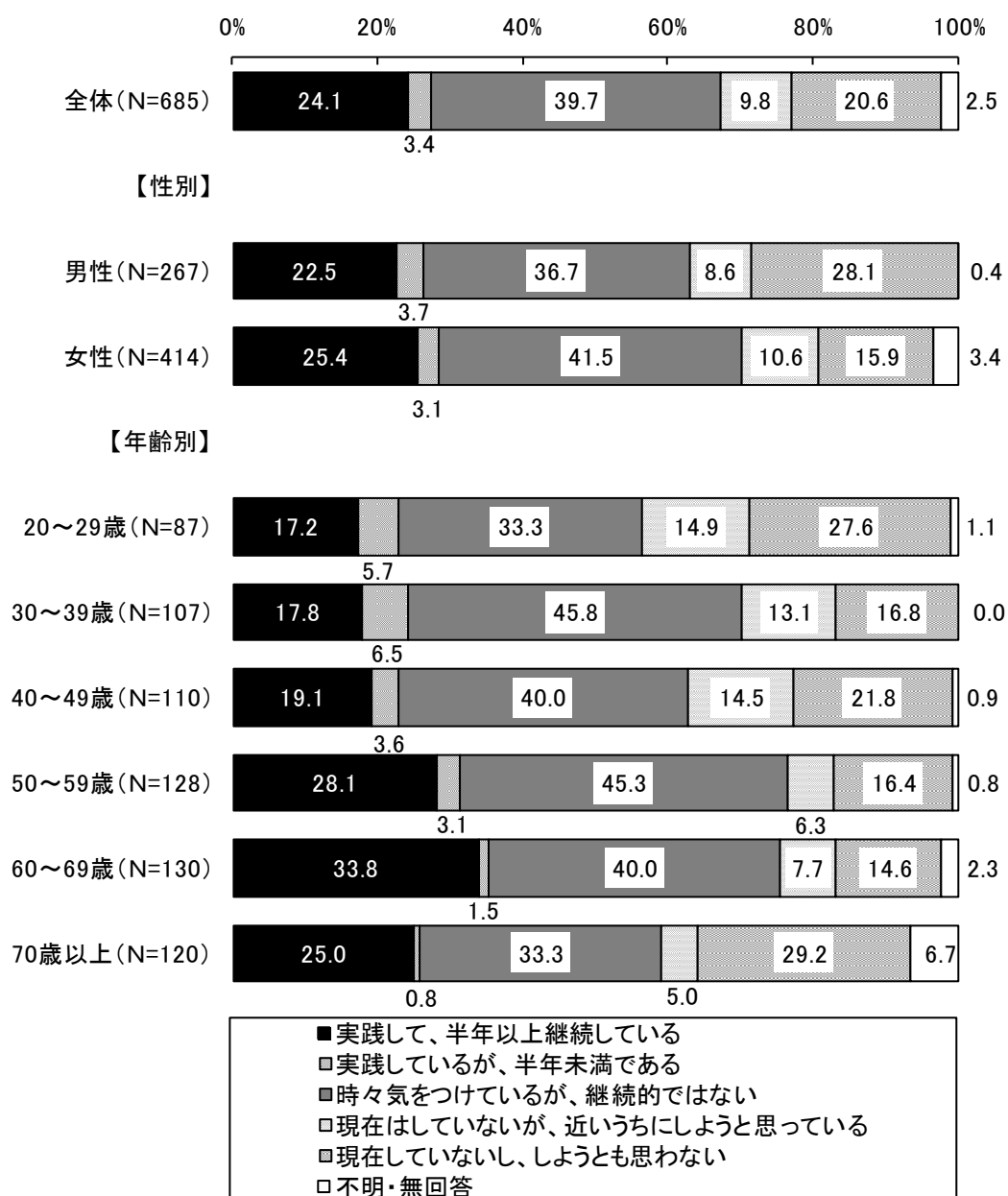
(10)「メタボリックシンドローム」の予防や改善のための実践について

「メタボリックシンドローム」の予防や改善のために、適切な食事、定期的な運動、週に複数回の体重測定のうちどれかを実践しているかでは、「時々気をつけているが、継続的ではない」が39.7%と最も高く、次いで「実践して、半年以上継続している」が24.1%と高くなっています。

性別でみると、男性で「現在していないし、しようとも思わない」が28.1%と、女性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、60～69歳で「実践して、半年以上継続している」が33.8%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民（単数回答）



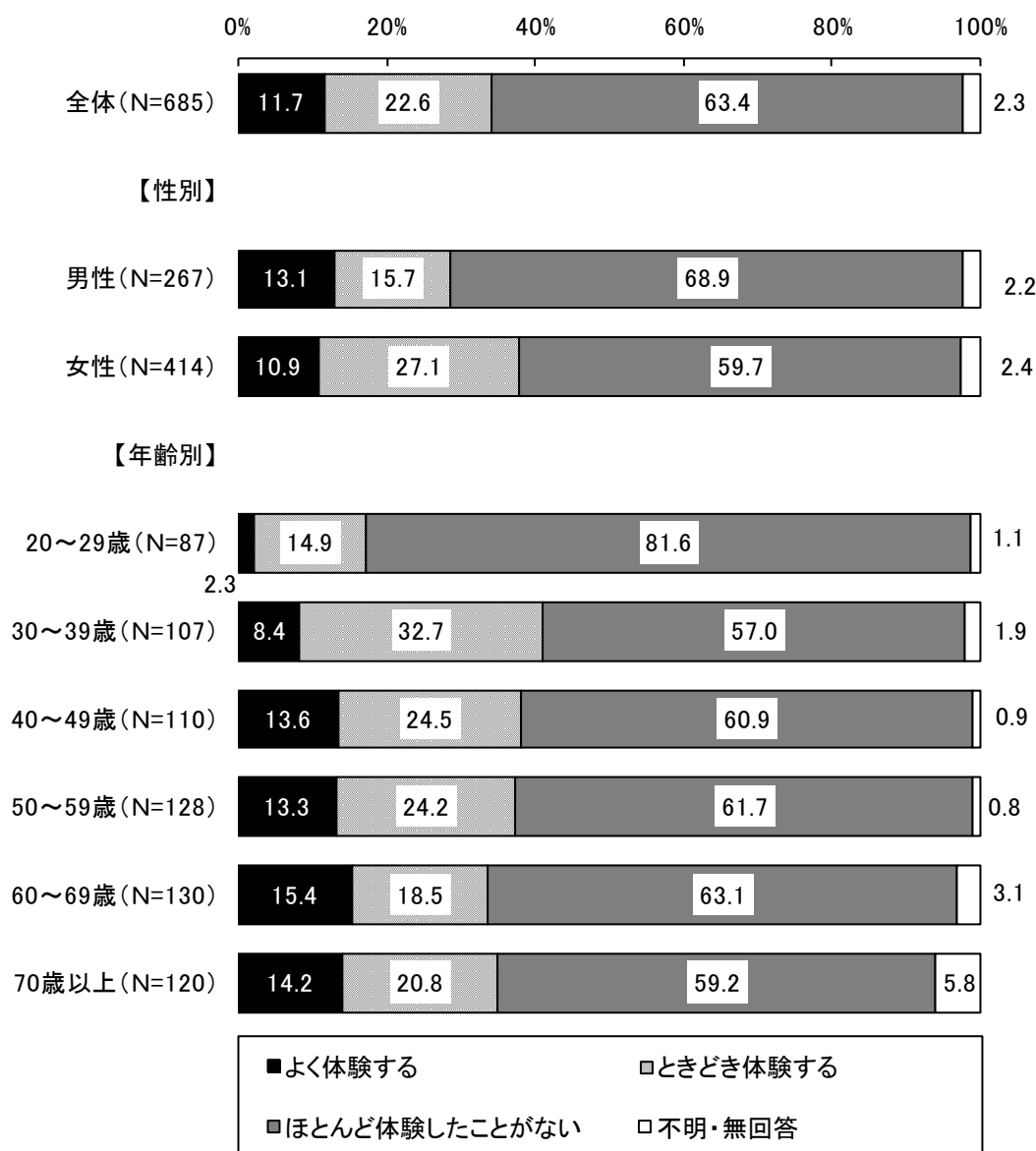
(11) 農林漁業体験などの食に関する体験について

農林漁業体験など食に関する体験をしたことがあるかでは、「ほとんど体験したことがない」が63.4%と最も高く、次いで「ときどき体験する」が22.6%と高くなっています。

性別でみると、男性で「ほとんど体験したことがない」が68.9%と、女性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、20～29歳で「ほとんど体験したことがない」が81.6%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民（単数回答）



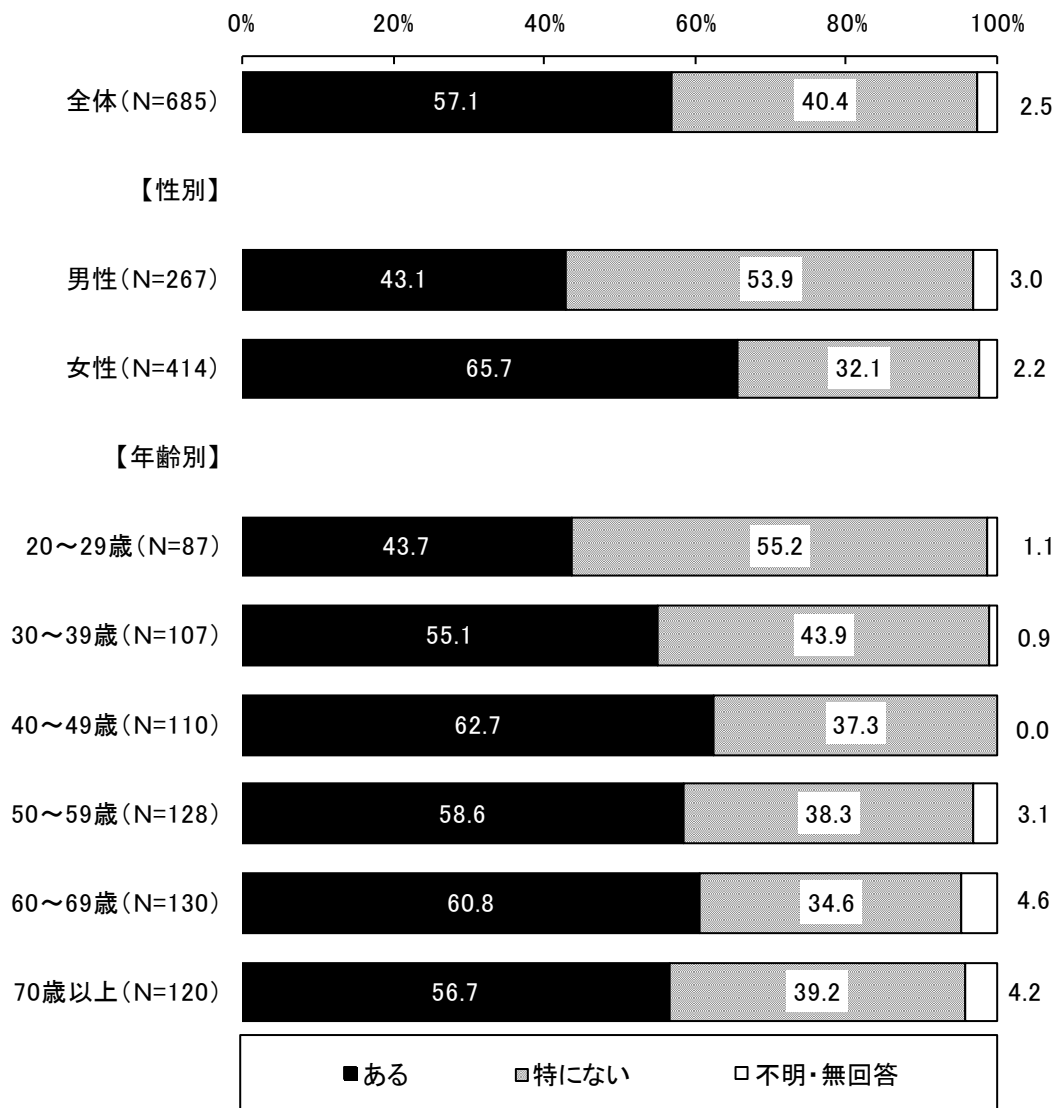
(12) 食品の食べ残しや廃棄を少なくするために取り組んでいるかについて

食品の食べ残しや廃棄を少なくするための取り組みをしていることがあるかでは、「ある」が57.1%、「特にない」が40.4%と高くなっています。

性別でみると、女性で「ある」が65.7%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、20～29歳で「特にない」が55.2%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民 (単数回答)

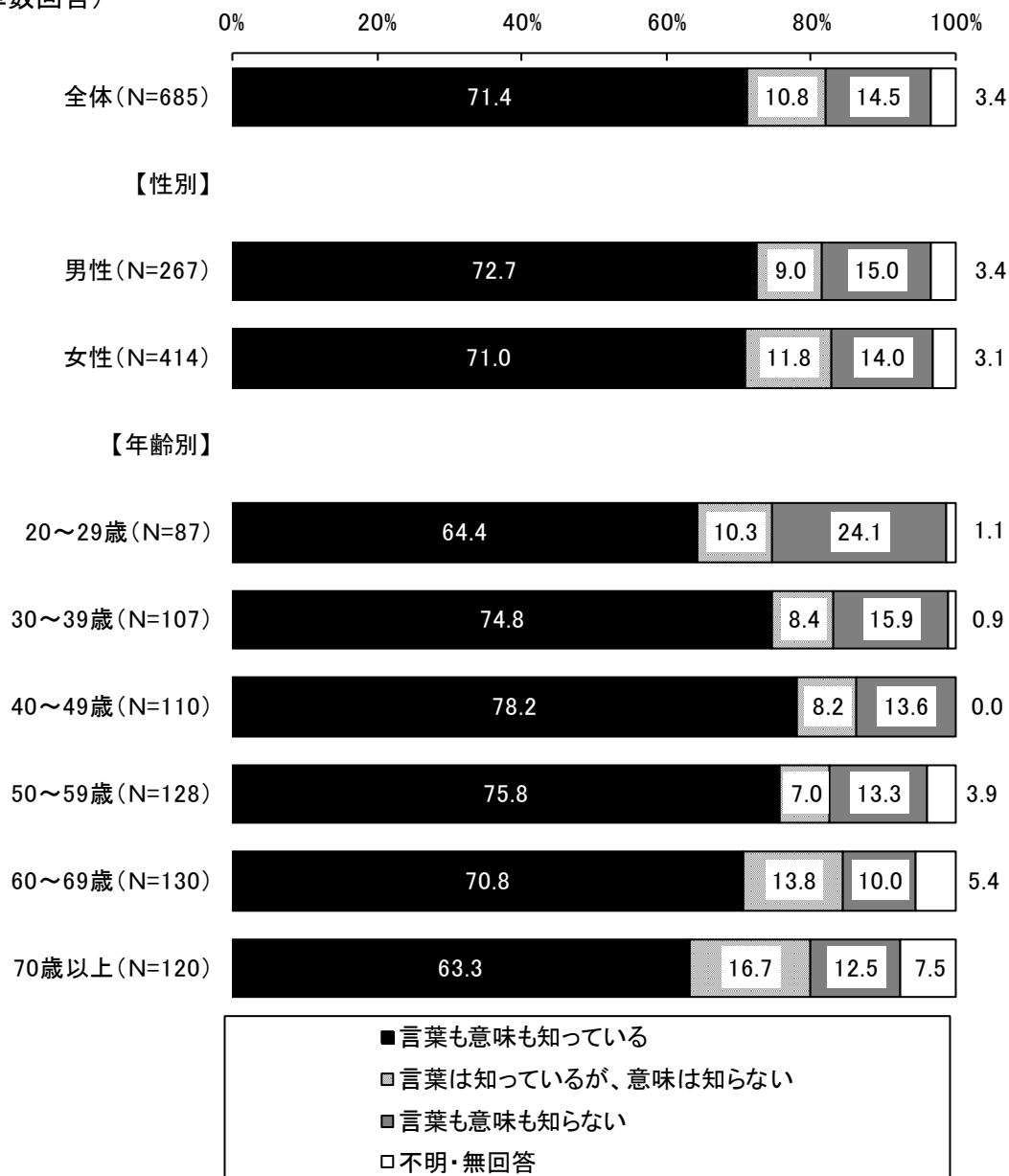


(13)「地産地消」の認知度について

「地産地消」の認知度は、「言葉も意味も知っている」が71.4%と最も高く、次いで「言葉も意味も知らない」が14.5%となっています。

年齢別でみると、40～49歳で「言葉も意味も知っている」が78.2%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民（単数回答）



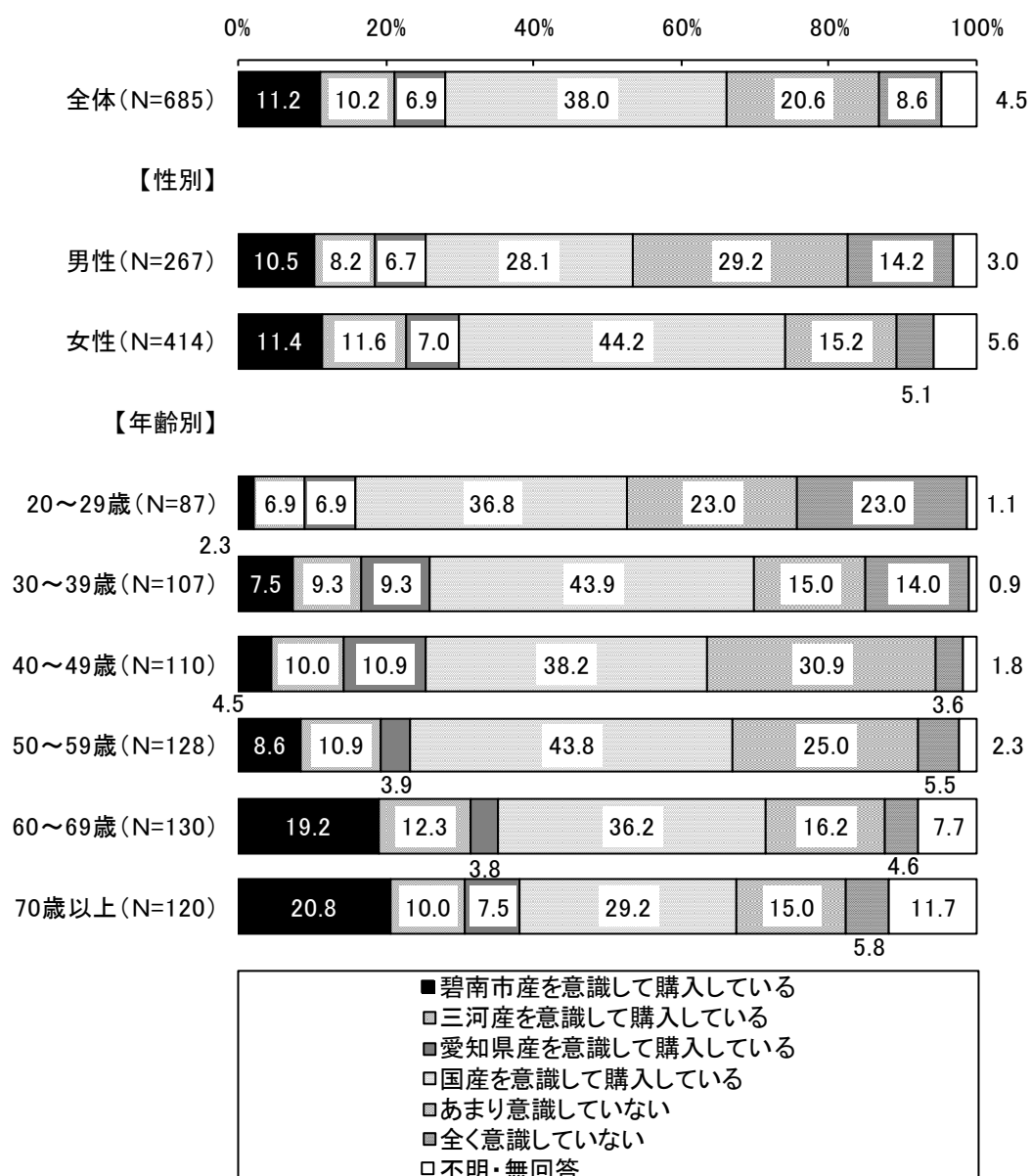
(14) 地元の農水産物を意識して購入しているかについて

地元の農水産物を意識して購入するかは、「国産を意識して購入している」が38.0%と最も高く、次いで「あまり意識していない」が20.6%と高くなっています。

性別でみると、女性で「国産を意識して購入している」が44.2%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、70歳以上で「碧南市産を意識して購入している」が20.8%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民（単数回答）



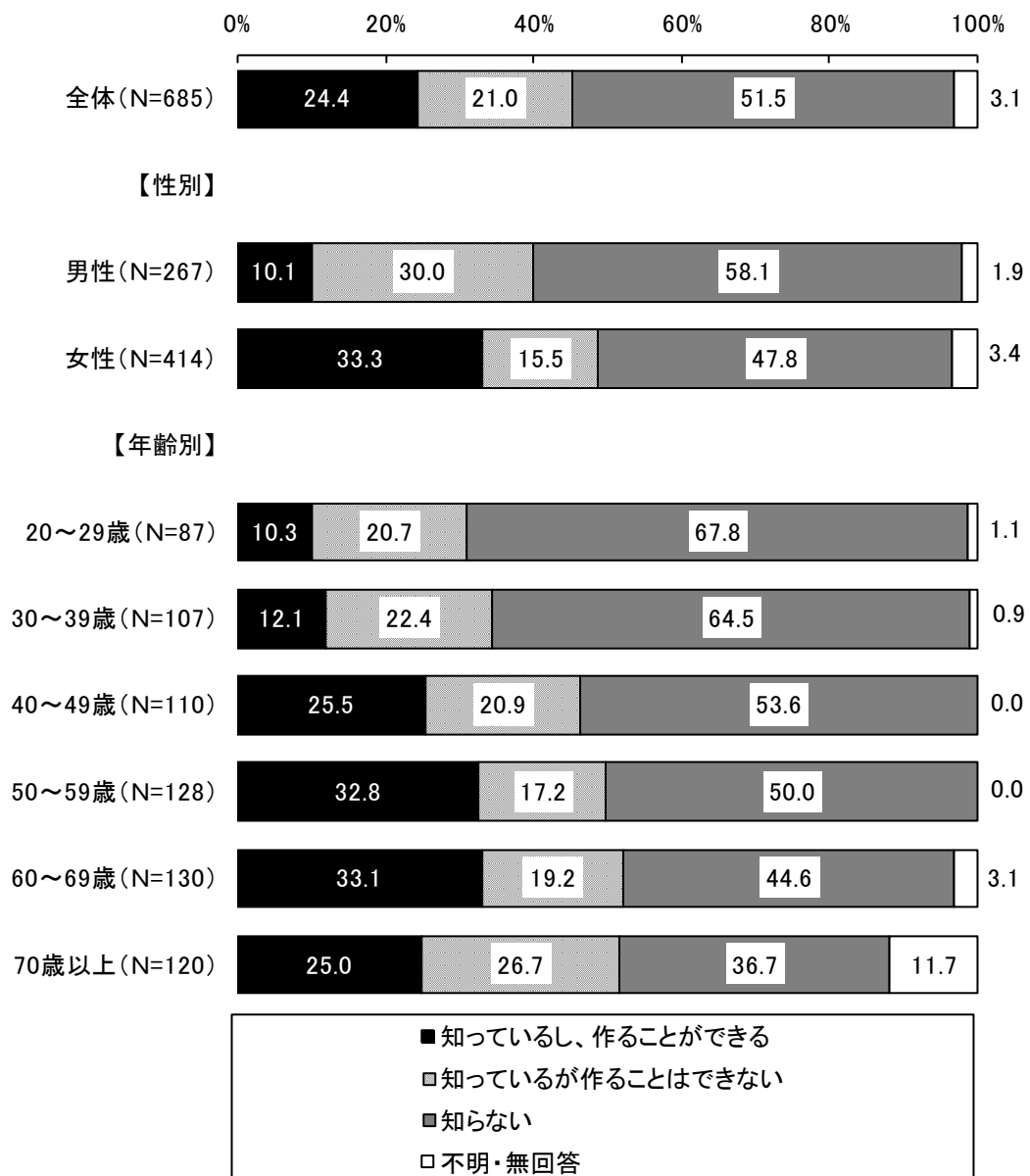
(15) 地域の郷土料理や特産物を使った料理について

地域（碧南市・西三河地方）の郷土料理や特産物を使った料理を知っていたり、作ることができるかでは、「知らない」が51.5%と最も高く、次いで「知っているし、作ることができる」が24.4%となっています。

性別でみると、女性で「知っているし、作ることができる」が33.3%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、50～59歳、60～69歳で「知っているし、作ることができる」が、他の年代に比べて高くなっています。

市民（単数回答）



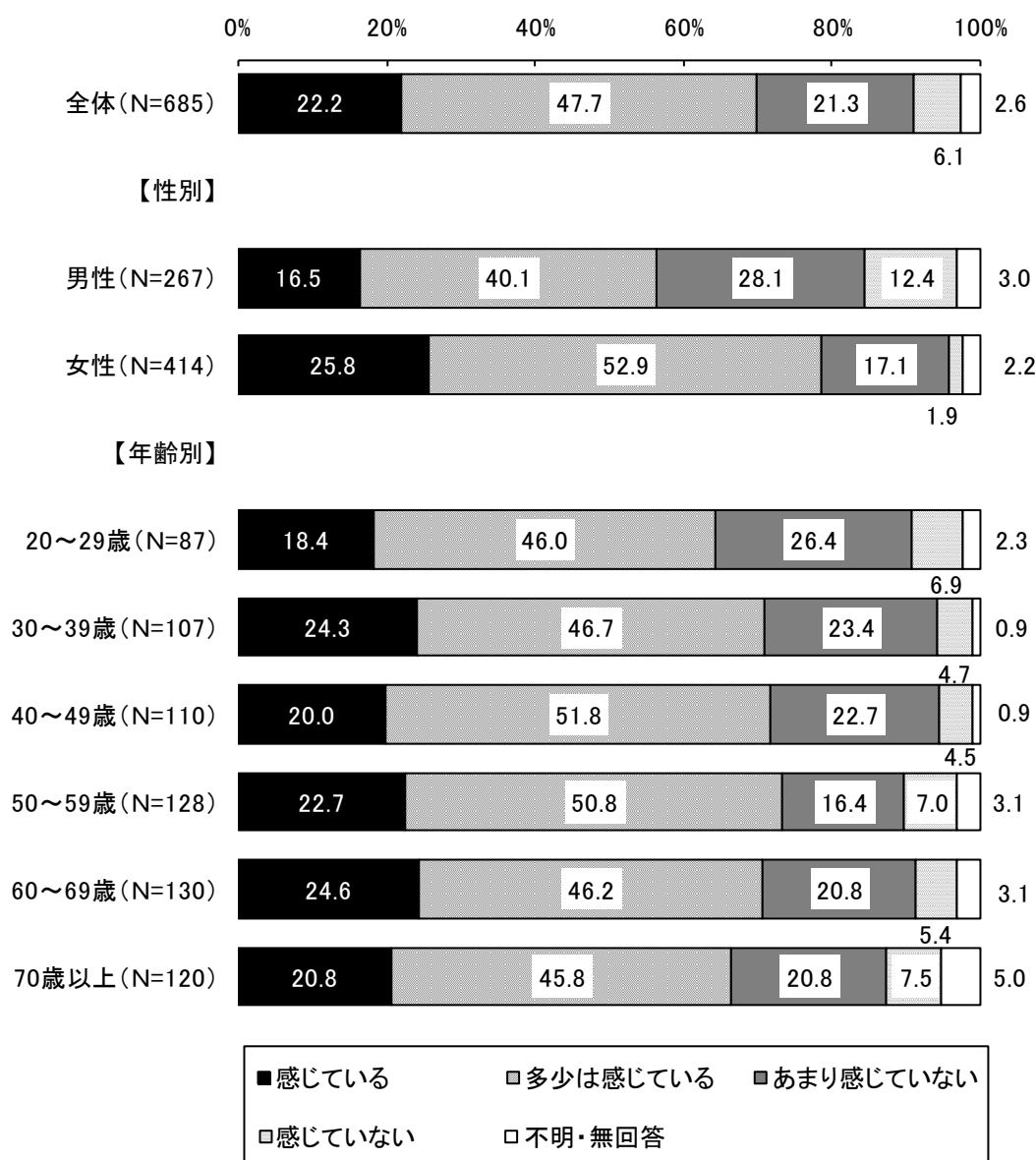
(16) 食品の安全性への不安について

食品の安全性に不安を感じているかでは、「感じている」と「多少は感じている」を合わせた『感じている』の割合が69.9%、「あまり感じていない」と「感じていない」を合わせた『感じていない』の割合が27.4%となっています。

性別でみると、女性で『感じている』が78.7%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、50～59歳で『感じている』が73.5%と、他の年代に比べて高くなっています。

市民（単数回答）



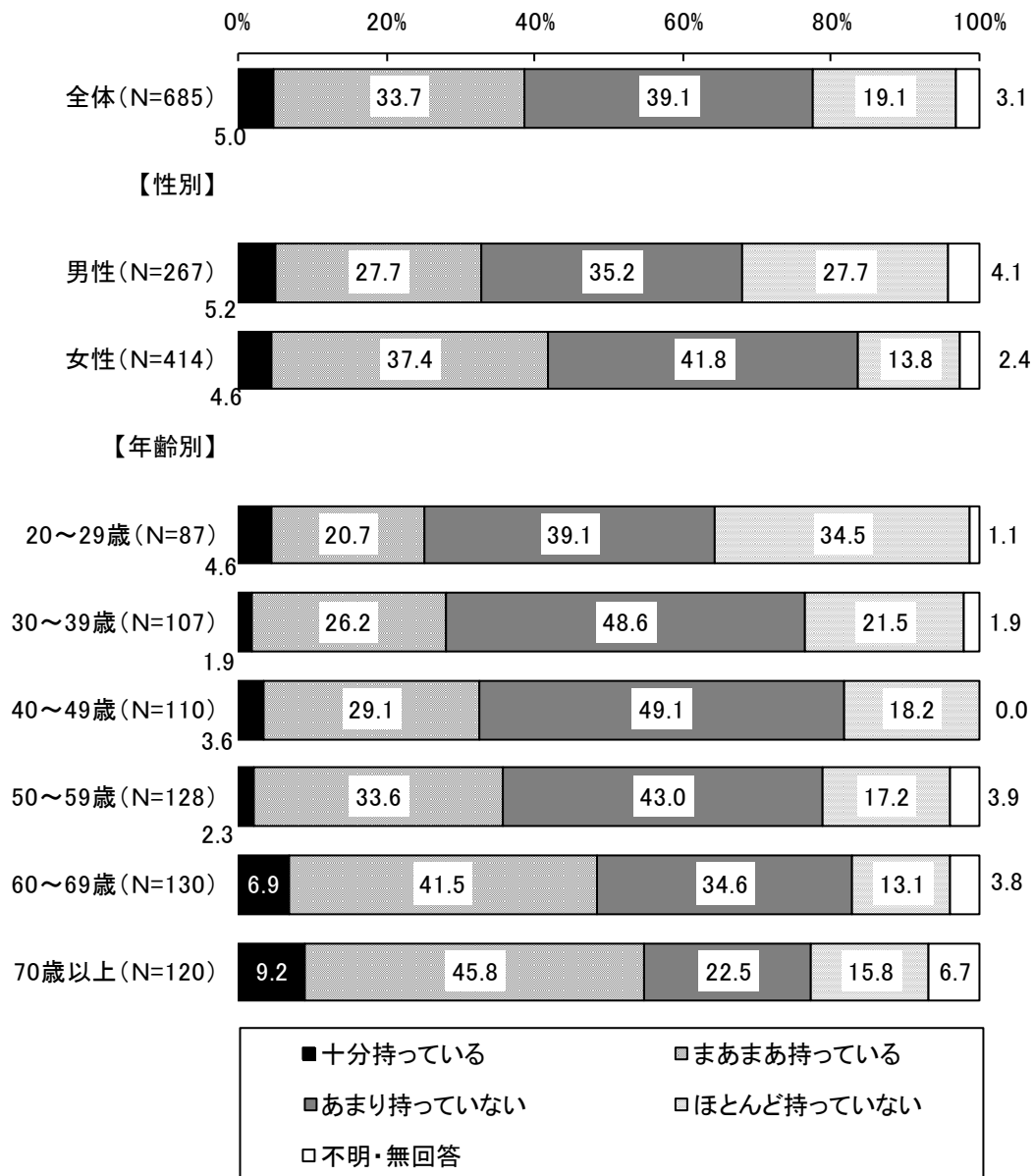
(17) 食品の安全に関する知識について

食品の安全に関する知識を持っているかでは、「十分持っている」と「まあまあ持っている」を合わせた『持っている』の割合が38.7%、「あまり持っていない」と「ほとんど持っていない」を合わせた『持っていない』の割合が58.2%となっています。

性別でみると、女性で『持っている』が42.0%と、男性に比べて高くなっています。

年齢別でみると、年代が上がるにつれ『持っている』が高くなっています。

市民（単数回答）



5 現状と課題のまとめ

（１）健全な食生活について

健康を保つためには、適度な運動やストレスをためない生活などとともに、栄養バランスのとれた食事やよく噛んで食べることなど健全な食生活が大切です。また、十分な睡眠時間を確保した規則正しい生活が重要です。

市民アンケートの「食育について関心のあること」では、「食生活と生活習慣病の関連について」が69.3%と最も高く、次いで「食生活の乱れの問題」が58.2%と高くなっています。また、「市民の朝食の摂取状況」をみると、「ほとんど毎日食べる」以外の人はいくつかを超えており、起床時間、就寝時間の遅い人は、朝食の摂取機会が少ない傾向にあります。

食事と生活習慣病などの疾病との因果関係を理解し、栄養の偏った食事や不規則な食生活を改め、バランスのとれた食事への改善と規則正しい食生活の実践が必要です。

また、保護者の生活習慣は、子どもの食生活の乱れに多大な影響を与えます。まず、保護者が食に関する理解を深め、子どもの健全な食生活を確保していくことが求められています。

（２）食を通じたコミュニケーションについて

楽しい雰囲気の中での家族団らんの食事は、豊かな心の形成につながります。しかし、近年、孤食の増加が問題となっており、子どもの情緒不安定や感情の制御が効かないといった状況は、これらの家庭でのコミュニケーション不足が一因とされています。

小・中・高校生アンケートでは、朝食で30.4%、夕食でも3.9%の人が家族の誰かと食事する機会が「ほとんどない」と回答しており、「週に1日くらい」「週に2～3日」などの回答を含めると、さらに多くの人が孤食の状態にあります。

家族団らんや一緒に料理をつくる機会、農林漁業体験における人との関わりの中で、楽しみながら食に関する知識や感謝の気持ちを育んでいくことが大切です。

（３）環境への配慮について

食品廃棄や調理にかかるエネルギーを抑えることは、環境への負荷の軽減につながります。しかしながら、市民アンケートの「食品の食べ残しや廃棄を少なくするための取り組みをしていることがあるか」では、「特にない」が40.4%となっており、食事を通じた環境への配慮に対する意識の希薄さが伺えます。

輸送距離の短縮により、負荷の軽減につながる地産地消の取り組みや、生産段階における環境への配慮も重要です。一人ひとりの意識を高め、食べ物と環境のつながりを再認識し、環境にやさしい食生活を進めていく必要があります。

（４）地産地消・食文化について

地産地消は、単に、身近で新鮮な食材を確保できるというだけでなく、市民のまちへの愛着意識の向上や地域の活性化にもつながります。また、地元の伝統食や郷土料理は、代々受け継がれてきた大切な文化の一つです。

市民アンケートでは、地産地消について、「言葉も意味も知らない」が14.5%となっています。また、地域（碧南市・西三河地方）の郷土料理や特産物を使った料理について、「知っているし、作ることができる」は24.4%に留まっています。

地産地消の取り組みと、それらにかかる周知・啓発を推進するとともに、地域の食文化を親から子へ、子から孫へと継承していくことが重要です。

（５）食の安全について

東日本大震災における原発事故により、農水産物が放射線に汚染され、食の安全性に関する不安が増大しています。さらに、食品を通じた感染症や食品偽装表示、残留農薬の問題など様々な課題があり、食の安全確保に向けた取り組みを進めていく必要があります。

市民アンケートの「食品の安全性に不安を感じているか」では、「感じている」と「多少は感じている」を合わせた『感じている』の割合は69.9%と高くなっています。また、「食品の安全に関する知識を持っているか」では、「あまり持っていない」と「ほとんど持っていない」を合わせた『持っていない』の割合が58.2%となっています。

食の安全性への不安の改善に向けては、市民一人ひとりが食に関する正しい情報を身につけ、健全な食生活に役立てられるような環境づくりが必要です。